该链种则

號月二十



《母籍日一四一月報》號二十節卷二十節 行發日一月二十年十時間 可認物便樂體至第日三月三年三十正大



元 壳 發 店商助卯田和 町修道 阪大 獲梅離九道 ケ田戸 頓支 池 三堀 支支支 支部

部部都會部

未水首北奥

4 さ船竹悟光事

大阪市

本通三丁目

原大

ま支

す部

0旬

會

は

必

ナ

前

月

+

日

迄に

決定

L

御

報

告

願

C

田谷藤山野

る美橋鄭山

光大御踏御京 川

非腕會回け聯 おにで忘る合社 +誘よあ年各主版 と興通十 もる日月旬大は例 會句桁會

ぬと賑恒京

废あ當

に會を修

席しづし 加されいた

々事かの神支川 も一な第に部

優賞會開同講同報開 ら出川勝

御席柳 自者手盃品費辭 由全拭 主部に御使と上の一生という。 柳歲獨煙 柳晚樂

大、地、人、五客、十秀〈呈賞(但し出席大、地、人、五客、十秀〈呈賞(但し出席大、地、人、五客、十秀〈呈賞(但し出席大、地、人、五客、十秀〈呈賞(個し出席大、地、人、五客、十秀〈里賞(個し出席大、地、人 川

行式

付けてあ

り他

ま粗

す品 かを

支御

部橋

夜十

六四

半日

内日四

本ツ

樂橋

器南

毛

皮

か

ほ

3

選

4

わ

を

池

伯

者

支

部

午十

後六

時日

會伯

事者

務川

所柳

年出

末心

小美

判笑

選選

美

笑

來

知

支

部

夜二

七十

時一

半日

ブカ中

ラフ島

ル町

枯

濁

水選

不

水

治

支

部

夜二

+

H

今貯

治蓄

支銀

店行

鍵蜜湯

小一心

樓風府

選選選

特

明

た

柑ん

席

者

15

即

3

治

支

部

夜七

H

今貯

治蓄

支銀

店行

臍記燐

り者寸

文曉存

庫童明

逃逃逃

野

明

大會 柳 雜 西天川 增植西姑生明 務 メ市京 永屋支 本南 誌 海平須永清市 田町 吾B 五大 五五日 野井崎里水 港上 大 教育豆 + 女金 九 形 教育豆 + 女金 方 九 也

忘年

柳

日方幹や例阪 時是同句九於 本 に年川柳上 大會を開催いたします。御永知 本年は更に / (素晴しい 大時を開催いたします。御永知 大台を開催いたします。御永知 大田(土曜日)午後六時半 七日(土曜日)午後六時半 本日(土曜日)年後六時半 本日(土曜日)年後六時半 橋 側本 與話一 南丁 四目 二交 番點

神味句句 い植福麻橋麻水平南日 山田生本生谷井電橋山上線路 與話一 九雨路雨郎鮎三 樓郎氏氏 天氏氏選選美郎四叉

支螢 主 鐵 者 4 支 支 催 部 部 部池 午三 午四 午一 H 後 後 後 Ti. 時 時日 時日 時日 ブ大 會伯 館院刀 場 四鐵 事者 娛、根 號ク 務川 樂三山 所 室ラ 所柳 室號病 願作 柿遍 相炬 路 物 飨 (静太追 鎚燵 我 苦家 樂艸 美起

悼

會

ま

3

笑人

選選

美

笑

題

幹

事

111 柳 + 雜 誌 F 社 句 關 係 內

公樂

選選

ル



四

國

遍

路

酒

井

大

カ

ル

川柳のたね(三)………

::青木

史呂…(吾) 鮎美…(至) テ

痴

韶

いの助 九波

(明): (宝)

音樂•映畵•柳誌…… 漫

毛利 辻

私の生活と川柳

------吉田木患子…(至)

支部五週年記念の記……廣江天痴人…(三)

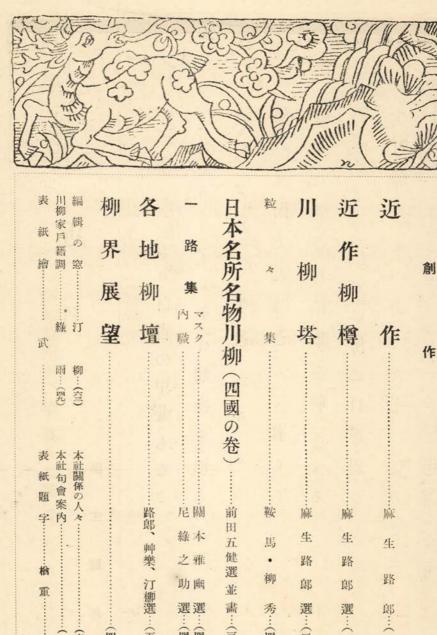
白

H

11 柳雜誌第十二卷 第十二號 目 次

文 苑

静太の死	明珠·春秋論	川柳指導講座(五)…	明治以後の川柳年表(+)…	武玉川二篇研究(三十)
:			+	
-	福	jij	: 西	蛭森梅
井	田	.l.	島	子 本
存	Щ	Ξ.	0	省東の
	雨	太		
光	樓…()	郎… (十	丸	二魚屋(三)
光…(四	=	7	丸…()	010



(美)

(型)

(公)

門

() ()

Æ.

24

夢 小 訴 寢 孫 決 ブ 訟 に 口 町 間 0 斷 して 逢 V 靜 算 た を C タ 術 ば 太 B 忘 1) i 七 で n よ ア n 大 0 月 9 3 ラ 重 自 騷 給 0 ヂ は 省 き 役 鐘 取 傍 才 0 i か を 體 髭 0 甲 T 七 輕 操 口 斐 を 暮 か を 0 h 6 剃 6 憤 鳴 過 ず な 49 ぎ 3 i 4) 3 (悼)



近

作

麻

生

3

路

郎



2 葬 别 鷄 名 安 追 お 安 陽 5 か 全 產 0 さ ぎ 礼 頭 月 U 炎 n 地 カン n を 10 越 かい 來 ボ 0 惱 る 帶 今 雲 橡 負 CA 麦 7 み ま K 年 ま け 0 6 0 金 片 が 朝 0 16 で 水 た 0 n ま 障 T. 0 遊 割 唉 寢 兵 選 だ 人 ば ん 手 枕 月 床 子、 解 か 海 生 降 蝣 で K 消 7 0 出 蛤 0 世 添 25 あ が 11: す 影 歸 並 下 母: る S. b 肩 を を Ł る る n あ 7 を 10 ま 行 出 炒 偿 で を 娘 4 け さ 4 Ł b h き 2 1) る L

近作旅档

路

郎

選

1"

大 大 W 妆 阪 同 利 同 同 輝 岭 同 同 同 同 同 大

生 親 女



ま 久 丽 首首 低 激 遞 ネ 未 名 E 瓣 初 母 チ \$ 代 を を E 世 10 氣 0 5 な 情 0 0 な H カン 娘 る ス プ ざ 晋 す 壓 馬 0 + 6 げ 陽 0 惱 靜 げ 1 B が 君 る 6 鹿 見 る あ T 0 n 爲 0 0 肚 生. 0 T L る 言 1 丽 ば .肥 紅 疲 流 H す 存 5 日 見 柄 旬 は 15 IT は T 鷄 礼 燈 ほ 社 權 記 n た h H 3 力》 \$ 6 長 を 秋 8 Bf-t 街 は 5 < 入 3 惱 + H 6 0 酣 旣 事 6 7 퉨 0 0 b 10 机 Ł 六 か 瞳 が は ば 0 0 0 K 7 野び = 燭 を が 旨 新 云 力 多 夫 冬 京 + 菜 箱 8 逃 あ 3. 10 b 姑 = 0 な げ 0 ま 减 2 H: な な る色山 し月書 0 る b 75 i) Ł 3 りね

阪 同 同 丁同い 好 同 靜 同 愚 同 靈 同 同 德 [1] -0 継 洞 子 路 助 郎 波 風



一 偖 天 大丁 浪 幸 な 子オ ボ醉自出野う仁 か 1 1 宅 澤 1 張 高 0 合 \$ 院 ふ尊 心 な な 山 ナ程心に あ < を 10 F. 偖 街 To 0 朝 7 蝶 6 泣. 111 ス K D 無 1) 杀 た 物 を 10 足 そ な ス 113 < 7 0 强 理 意 瓜 L 3 走 知 稼 b 變 よ b 配 ス を 氣 順 行 1 h 力等 6 た 4 方 七 る き な の女 あ H 4 番 0 20 散 82 さ不が 5 7. 10 K 父 世 の年 7 女 風 ス 步 To Ł だ け やが 平為 未 113 は C な な 3 + 取 8 う幕 な # 氣 b だ b 書 る 10 b X V る n 錢 K 獨致む から 無 街 K の二幕 夏 2 VC 模 數 0 來 りすか 風十れのな 强 缺 沙. ま 17 範 生 勒 3. 風 分 る きり者るず呂六し會り V

Ti 娱 治 阪 薬 同 美同芳同沐同 勝 同水同 義 TE. [ii] 翠 同 智 太 風 泉 J. 岸 天 郎 魚 T 柳 魚



な 1/1 魚 反 流 未 握 咽 虚 寂門さア辛旦達 抗 屋 行 7 飯 暇 榮 L 構 抱 那 雏 錢 を 力。 1 自 を V. 世 5 3 6 を 見 0 10 n 付 H 追 8 慢 女 す 1 L h K +1-0 態 取 1 7 柱 3. を 7 風 Ł 3 Ł ね 礼 v Ł な 度 7000 T あ呂 來 は 0 34 Ł 昔. E る な 高 T 卷目 反 Ł ば幕 素 0 け L ス を 1E 方 6 代 た 女 言芒 氣 82 ず 知 0 先 感 LL 法 6 だ 診 は 男 房 が な 心 買 け To た國 晴 は K ゆ が < て 讀し Ł 乞 勢 所 欠 C n 落 n 迎 < 脈 見 は 4 てへ火 T 食 調 3 忙 网 葉 を T 礼 之 退 K 2 くにの 取 す 3 な 亦 70 屈 たる 1 しるるれ來車るり票 b b な 父 人 きい

大 阪 葉 同 天同井同庄同堯同朝 同 笑 同 同 星同 乃 光 峯 鬼 國 介 蛙 子 雨 水



人 値 4 薬 生外屋 履お戸 配三虚 年ち冬 額 根 き 隣 達 僞 番 生 6 活 交 棚 Li n 近 6 Ł な を 捨 は 0 0 カン を き 頭 n 0 屋 行・て 3 初 0 DU 6 淋 違 力 智 82 窓 枝 る 世 根 慧 十 容 ち 3 3. H L 2 大 カン を 青 暄 1 て N 弱 カン カ Ł 1 3 44 哀 阪 6 嘩 E 借 x 存 死 味 野 から b 受 0 麗 K す る 1 0 な あ T 悼 壁 が 0 付 遪 る る ~ ル H m b b 秋 のたに T K 1 な は 應 1 あの 10 社 風 は なひ り足 K 3 白じ秋 を った 送 淋 夜 K 呂 \$ 0 袋 建 犬 1 號 畸 H 6 し業 力 5 10 \$ 10 ろ、こがれ並 なてれ N 憶 は 3. 0 めましりとしぬび ぢ 吉 容 りし來る な灯り

九同や 同九同木同 天同 原同今同 あ 11 史 V 風 2 紫 紫 圭 ち 子 弘 雨 美 葉



土母心宴う見朝失冷外圓巡 落 近 1 0 職酷交 禮 選 道 た えの を 0 る風 得 、 のな 人が な 秋 b 承 知 娘破 停 飲 佗 昇 世名 た 5 が知 - 列 似む 85 すて 給の 笑としに刺 上に L 禮 る 合 裾 半 7 自 額 < 逆 屆 1 Th. 鳩 な 動 女 をと日先 5 は 額 候 過數 少 が 車 1 若 をに 行 ぎは 0 \$ Ł ロすう つ買遊 膳 塀 き b H は 7 てふんを スれに あ 豪玩で立陀配 き はどか 人んひえ所具來ち袋人なた れきれ 5

阪 [17] 同舍同無 同靜同 吉同士 昭 同 節 左 智 鐵 皷 帆 pq 子 人 砲 太 右 恩



處 見 天 寢 相流失不 才 旅 金 青 オ 介 AUE. 髪 朝 E 抱 轉 女 0 花 F 春 九 戀 愛 1 を 戾 担 策 n は げ 夜 會 0 行 t b h 果 想 × 0 ラ 欄 0 0 夢 バ 12. b 1 0 1 が 淋 < C 腹 何 な た 母 女 1 跳 ほ n ガ な 雲 霧 L を C 他 露 げ 思 郵 房 斷 n ま 1 12 間 き 路 75 そ ま 人 0 ち 笑 Vo 4 故 0 便 車 0 を 0 3 0 3 小 百 切 15 セ 待 鄉 た 年. 局 0 額 苦 活 ば 犬 世 屋 17 る 0 x 競 0 Hi h 出 力。 0 を Ł で 0 势 途 100 字 1. た な 3. 3 間 見 酌 11: 0 家 腕 迎 0 0 1 道 墀 0 Va 世 違 有 又 を 襟 L T 0 力。 カ 10 を 1 10 H て が 6 難 秋 力。 建 20 續 た L IE. 夫 バ な 熟 見 6 70 1 祭 3 す 10 け 話 L け n る 1 T 1 b b 12 る

高 松 班 大 阪 T. H K 阪 江 野 丽 登 崙 六 賣 滿 非 不 天 案 肖 甘 · 一 牧 木 水 玉 か 喜 美 茶 =: さ 常 Ш 寸 固 也 む 蓝 絃 亭 棐 兒 號 界 潮 子五雨夫人 履 を



人 此 私 村 嫁 物 秋 継 # · 若 网 世 廣 蜘 7 飲 稻 生 蛛 な th T 3 晴 人 渡 重 H 管 祭 停 兒 0 づ 6 丈 h 0 0 82 0 0 礼 8 0 17 小 Ti. 車 巢 吡 12 0 0 0 屏 T П る 0 白 0 何 K 作 な T 0 8 風 父 足 小 畑 力。 地 7 人 7 泣 b 周 0 0 苦 6 年. K 3 T 後 to 忌 結 K 世 思 Ŧi. 10 颯 擔 力 あ 8 な 111 養 0 る 10 局 錢 が げ CL 秋 は 猫 案 IIII る あ 爽 鬪 7. 藏 服 0 n 0 線 0 寢 を 0 17 爭 10 丈 身 0 が 0 Ł = 田 見 世 す K 陽 7 親 氣 0 验 錠 1 4 10 を 25 女 0 る 子 が 4 る かい 4 b な 10 け 氣 心 錆 光 尖 飲 5 連 笑 來 た な 75 7 71 き 12 る 0 5 礼 b i) b 71

京 龍 丹 船雞天水紫昇久 花春つ 莞 放 馬 Ξ 米 Ł 世 占 出 笛 石 秋客香鯉雄鳥 巢 介 郎 夢 路 山坊 子



ま 六 子 風 交 赤 客 2 朝 落 秋 3 h 0 感 際 0 1 .S. 尔 癖 4 0 を 無 丰 n h は き な 0 不 2 知 を V 濱 Ł 便 to た ま 7. 借 b 19 h 夜 末 h 0 布 師 0 女 ず IC IF 報 0 匠 團 休 聖 v 直 浉 生 來 3 歸 0 h = 1 0 命 h 沼 h T F 1 自 を 0 秋 C T K F 我 云 持 似 E 死 7. ね カン は T を 克 T な 足 が 5 n 鼠 あ 3 あ そ産 出 疲 ひ 主 7 な W 纏 ひれせ 1 れるた 3 3: る

=: 現 共 香 葡 滿 次 實 場 水 猫 月 會 10 0 糖 香 明 見 無 b K 限 H 3 ぞ Z 0 ワ 獸 0 話 4 食 1C 愛 T 笑 - hs な 3. 錢 1 知 8 n " 拜 3 5 細 む 8 得 VC T な 2 き き た 出 3 頸 b 3 T

大阪 等地 年 東 地 田 華 即 庫 平 更 逸



先 左 傘 去 喧 カン 良 牛 J. ど初 (III) 金 見 病 П た 曄 < 8 0 糖 総 樣 2 輩 0 總 は 室 3 12 n き 0 \$ 0 病 が 10 L h て . F 見 だ 111 が 莫 氣 頭 X ぼ な C ル F 8 見 ち 0 白 之 密 T 桃 を 親 迦 < \$ 0 4E 篠 が to 1 ボ == 駄 \$ ~ t 柑 1 82 下 を 4 灯 0 3. が h 3. 笑 怨 味 * 白 げ を 0 から だ 女 夫 K Ł が n h 7 青 號 送 線 島 事 給 姑 我 落 1/1 雨 h 18 な 寄 外 が VC 3 12 原 さ 0 で 力 7 K 2 務 あ J. 南 步 S. Æ 悲 77 霧 附 (1) た 政 4 2 君 1 戀 0 0 K 鈴 剪 0 \$ 治 0 \$ た 礼 \$ \$ 0 0 な 敢 な ま 0 あ た あ 0 7 龙 6 1 3 12 L 1) だ 20 1) 1) 12 音 3 1) Ш 12 達 顏 3

加 大 夢 寒 决 有 凡 愁 柳 111 美 梢 文 藤 秀 秀 小 弘 之 椀 寫 刺 10 果 路 文 月 霞 郎 生 草 坊峰 郎 割 典 愚 狂 紅 间



停 下。有 醉 父 花 書 美 牢 並 だ 事 野 新 逝 月 0 電 3 風 h 見 粧 道 段 K 水 務 良 婚 き 日 出 呂 ち 0 者 0 居 0 查 カコ 歸 父 を 居 さ 1 あ を 0 夜 數 82 3 T 6 都 0 訪 を 無 K 座 114 5 5 を b 證 ~ 去 思 並 合 0 弱 事 據 IJ ま る ネ 長 0 層 坊 想 K 木 Ł 母 ば 氣 10 10 力 1 \$ 屋 殘 7 Œ カン 0 カ を 10 勤 チ ラ 剩 る 12 手 靴 -カン 人 な 0 0 L 本 14 80 金 17 巡 ま を 0 噂 -秋 \$ 店 世 7. 7 \$ 作. た 17 IJ 力。 0 H 1 7 取 は K 7 0 海洋 慕 0 話 次 ズ け 淋 だ to 想 を 吡 0 逃 勤 戾 生 左 10 Ł 6 第 111 裸 17 Ł 3. 7 げ 6 8 る 欠 き な な n 褪 力 夜 12 0 fl: 25 カュ な 加 3 度 1) b 3 3 1) 80 な ぎ 7. 3 酒 b

為 石 恋 松 古屋 根 校 111 îI. 朴 美 芳 都 窗 蘇 蕪 L 柳 双 觀 公 笑 荣 3 柳 津 Ł 蛙 之 V 太 泉 女 樓 枝 子 泉 堂 人 L 夢 亭 月 子. 朗 進 ち 路 郎

轉 踏 交 な

任

地

近

<

等

b



年 賀 廣 告 を

名を逸せられぬよう必ず一口以上の御申込を祈上ます。 を願上ます。尚多數皆樣の御申込を得まして、立派なる川柳家名鑑を作り度く存じてゐます。此際貴 風交を温める名刺交換として、 例年の通り新春特輯號の川柳家年賀廣告を募りますので、 ぜひ御賛同

金 員

切手代用でも差古一口分の原稿は統 定支ありません)で願ひますは簡單に、御申込む 一(三銭 以下の

+ 月 + B 嚴 守

申

込期

限

柳 雜 替 大 社 阪 t 事 五 0 務 五 0 所

111

3 叉 隣 點 VC 叱 ち 鍵 る 6 を 草 n 憤 あ T 懣 20 づ る 0 け \$ バ 車 b ス E ケ Ш 移 ייי 遊 3 Th 1

石 大 金 -111 籔 275 鐵 緣 水 3 ナ 樓 心 子 水

は締切ギリへの十一月二十二日である。書 き終へると直ぐ飛行便で大阪 ころが、 はその埋合せに大馬力をかける心算であ たと 先月は自分の多忙から何うしては この講座 時間がなく到頭休んでしまつた。 爾後何やかやと雜用に取紛れ、

座講導指柳川

鞭 を 思 N

動物を愛する心」「冬と自分」選評

今月

111

太

郎

まことに川柳雜誌社並に讀者諸君に申譯ない 心に餘裕がなく悪文を練つてゐる閑がない。 思ってゐる。 へ飛ばすのだり

今日

は早速先月號の分から取りかいる。

物を愛する心

植木の好きな人に悪人はないといふが

よい。流石に犬を取材したものが一番多 動物を愛する心も亦「善」である。だか かつた。 ら集句のどれを見てゐてもみんな心持が 歸り來た子へもポチへもおやちやリ 忘れずに居たのかポチ奴ざれて來る 下駄嚙る靴嚙る犬叱ら 半分を野良犬にやるピクニック そうとして犬の豊寢をさけて這る 犬ころもやつばり母がよいとみえ 紋服へ五月蠅 先 第 信 程 1= は 犬 は 戲 美津女 京 卯 狂 し第七、第八句共に幼稚である。第八句

温情へ犬はくるリと 腹 第 一句は平面すぎる。もう少し何かを を見 t 禿 Ш

全體がタルんでゐる。 感傷でお芝居めく。第四句、 そしてその中の二字なのだ。絶對に有効 に使はねばならぬ。第三句は少し安價な は大いに不可。川柳はたつた十七字だ。 では二字不足するから犬ころとしたなど らはしい。犬ころのころは不要。犬だけ 犬の母なのか、人間の母なのか一寸まぎ 睨まなければいけない。第二句の「母」は 第六句は誇張に失 第五句共に

るづかひは度々言ふ通りよく注意しない 名づかひは度々言ふ通りよく注意しない の「おやち」は「おやつ」だろうが、假

次に多かつたのは猫だ。

50 句は句 何 闸 L か中 第三句 の降つてゐる戸といふのであら 「母病め 抱抱けば 第一 「病めば枕に へぬ野良猫 眠る膝を崩 の戸が開いてゝ猫 0 第五 が浸 は恐らく集句 が猫の 座五ヘシックリしない。第二 ば 染 句の技巧 0 h の血を 瞳 近 す はもつ でし 雨の 4 1= 1= 戸」といふのは無論 が歸りません は陳腐 淋 まつて 恐 猫 氣 と考 中 怖 0 兼 の住唱 あ 居 が ŧ ねる。 へた句 だ。 L る IJ で 第四句 うが、 語 與太柳 都會人 水 あら が欲 光 客

馬の句があつた。

方も同じバケツの は僕がさ 1= でなし馬は叩 5 せ 5 7 ふ情景を 見た事が ימ れ 0 飲 T 皕 3 夢一文 Ξ 吉 る。

ないので、 は見出せぬが、 くべし。僕の題意を離れて「愛する」心 方がない。 る場でない」のだか鳥渡解ら としては凡作である。第三 あ る。但し作者は宮本君であるが、 第二句の「奮慨」は 何だかウソみたい 何としては 何 相當なもの 「憤慨 は何故 に思へて仕 82 」と書 同君 で H

福田 議を申し込んで居られた。これは小生に を直に輕蔑してゐると早合點した事 憾とは小生はあの中で「古川柳の多くは を相手にした雑文を福 取つて頗る光榮でもあつたが、また遺 生が書いた「馬」 あた事及び小生が

退窟であると言つ も拘はらず、「多くは」の三字を見落して 僕に取つて退窟である」と言つてゐる でもあつた。光榮とはあくした初步の 人が讀 なほ馬で思ひ出したが、本誌十月號 Ш 雨樓君が東京の柳誌 h でるって の選評の一文に就 臭れ たとい 田君のやうな忙し 「きやり」 ふ事で、 て であ たの 讚 小 K A 憾 抗 6

なん 恰もべ る。 世の 50 る。否寧ろ尊敬さへしてゐるのである。 びあの曲 最大なるものであるにも拘 國寶的 て終點 待狀を貰つたみたいで、 アカンと上眼 Ł H る僕の自責を怪 や浪花節をその卑近な様に擧げて あるし、 かと思ふと、 たあの抗議は、 君から「柳壇的 中 てもの 要するに多くの三字を見落して出 前者に能や狂 こいつウッカリ、 1 には退窟だが尊敬 へ着いた。 存在とい 面白 を輕蔑し トウヴ は、 いが軽 折角福田 で人を見なけりや 凡そ小 ヱン L ふ言葉も、 殊にその いち 退窟即輕蔑と早合點し 一言を學げ、後者に漫才 てねない 國寶」なんて言は 0 蔑しちやふも 第 君が吳 生に取つて退窟 h おだてに乗つ に値 鳥渡途方に暮れ だとしてゐる 儿 退窟感に對す 0 は 0 税務署か らず、 するも と同じであ 和 7 ならない た柳壇の 才 のもあ 4 彼及 たら 九 6 = 1 1 0 る

ツキリ言ふ。「僕は今なほ多くの古川柳話は少々脫線したが、僕はもう一度ハ

が全てを輕蔑してゐるものでない事は、

小

生は古川柳の多くに退窟は感じる

る

0

である

前

句

0

我が世とぞ」こ

何

0

「なん

熱燗が

利いたか吹雪なんの

そ 0

0

そのし

體何だつてこんなに氣取

智と無情を何とか 退 窟 を感じる。 なら 然か も僕はこの h か と思 0 僕の 7 る 無

歩け ピー なくなる。 せ僕は非 0 0 は 黒の やうになつて質に 啦 ない。 と蚤が ル は 紋 は冬になれ 常 派 年 心で飲む いいや 10 中嫌ひな季節 寒が リとフ で多は b ば E 素的 グの で、 なる 1 ル 炬 味 往來なぞは迚も であ は、 程 燵 は 美味 がキ がこたへられ な る。 腹 い 0 ラ その 4 E た が IE. だ。 じ夏 < 氷 月

元より ぎてゐて作者の本格が出てゐ 2 0 n += 本酒若くはウイ 艦酒へ冬こそ我が世
 ば がはこの冬になつてか 然り。 かり H に吉川英治 は冬は 但 L 2 ス E と卓 0 丰 1 ح 1 句 ル t では を共 は K 11; 限 6 思 な L る。 10 " 5 U 氣 H L 1 た 取 E な 先 かい 0 v 太 間 酒 0 音

て就に座講導指柳川

者と共 辭を見 を覺 講評振 111 してよく 者 ろとは云 L 諸子 分 ?評裡 Ŀ 渔 えるの が か に拍手を惜しまれ 自 出 に終 0 太郎 りは川 想到 謹んで御禮申上げます L ひながらこれ 曲 本 得ない であ 心端とな 奔放 講座を最 讀 するとき感激 むりますっ に流 柳愛の然らしむるとこ 歲 のであります。 のい 1) まし 後まで指 れ に酬ゆる感謝 か てゐた異色あ H なか の多忙さに の又新なる った。 几 導 せら 獨自 4 讀 な 3

た言 さうしても る 最近の句 本 E る。 Ch 品 方をする \$ つと弾力的に詠む 0 は よい と真卒に、 0 かっ が なす 4 \$ カン b ら沁 つと素朴 0 Lo H 7 H た 僕 上品 区 て来 0 であ

は

よく酒を飲む友だち 0 冬 0 貌

が いが、 とい 出 ふの てゐるつもり 或 る點までは がある。 これ である。 ノソリとしたところ は冬と自 分では

まだ狙 E 0 旬 はあるが、 既に豫定

氏

0

III

柳

指

導

講

座

かい

絕

大

な

な 50 大概諸君 ものだ。 は心苦し 生主幹 たど三年 雑然とし 中休 それ る K んでし な カン カン 諸君 ら半年 -0 0 た書きやうで甚だ濟ま 50 6 後、 何 たい V ---も僕 然し まつ を 1 のだ。 Ŧi. それ ケ 連 御 年の が心か ナシ たの 「挨拶 何 續 時 0 K それ 後 も鞭 約 2 通 7 を 僕と 6 L かい 束 L \$2 てし 憎ら が本欄 ·C. は 7 た 引 僧 5 50 ふド がられ まつ つも L 82° 受けたが 1 0 當 0 5 0 だら た 殊に 初麻 ス 最 黑 事 後

0 5 鞭を思ひ出 して吳れたまへ

き名講 お指川 誇 筋 * 合の りとするところでありま 40 知 導講座擔當を快 Ŀ n 6 氏 師を得り * せい る課では 0 のでもないだけに、 後をうけ たします。 たことは本誌のい なく、 て新 諾されたよろこびを 指導講座 誰にでも に塚越 よすっ 斯く IF. ささ 賴め は 光 離 氏 引 か續 る が

111 柳 指 座

投 締 課題 旬 -17] 本 都 社 fip Л 事 十五 務 會 所宛 養志 詩 塚 越 人 正 光 月 何 號 氏



本

秋

東

子

主 15 昌 之 篇

(539)初 小春の興である。「不二白く富士青くして小春 T L + 月 0 猪

かな」の感じの如く。酒を酌むに可ならむ。 省二二

猪口を持 で「青し」は蛭子民のお説の如く、小春の心持ちであらう 秋の屋=十月になつて初めて青いとは?。 魚 つて來たのは何に 青天は特に春の室に誹諧では用ひられると思ふ か前句の關聯上であらうか。

(540)

3

0

3.

け 5

翌

は

見

捨

る

小

松

原

はその風景にはなれ、目的地に急ぐ。 = 小松原續き。その蔭に憩つたりもしたが、 明日

秋の屋=東海道の旅行と思はれる。

魚一小松原に倦きはてた心持ちか。或は小松原に名 いと思ふのであらうか。

= 寄 矢矧長者の娘淨瑠璃姫の侍女等が、 辨慶關係ではおかしい。サテ…… 合 T 解 < 4 若 0 族人の牛若

(541

秋の屋

がうかではれ可笑味がわく。 丸を優待するので、辨慶等ではない。 魚― とでもした事であらう。と云ふ處に作者の奇智

- 20

(542) 傘を外れて歩行若い

省 二 傘を外れて歩くところに、小供の時から若殿ら

秋の屋─ 若殿が袴着の社参と思はれる。傘は乳母の日傘

東魚川日傘に数。

(543) ふるへは鹽の落る 行平

省 二 ■ 松風村雨に馴染むだ中納言。――古人は斯るトボケタ句を作る。歴史吟は澤山よむと、何んとか其上の一ボケタ句を作る。歴史吟は澤山よむと、何んとか其上の一

★ 魚= 諧謔なのであるから、實際鹽が落ちる落ちぬに★ 魚= 諧謔なのであるから、實際鹽が落ちる落ちぬに

たいまかし 看は学技方里を面白く思え

(544

中

は

ㅎ

は

橋

0

3

ち

T

大

名

省 二 三河矢作川に架る矢矧大橋。江戸幕府にては特別に保護をした海道第一の大橋で、東海道名所圖會に、長別に保護をした海道第一の大橋で、東海道名所圖會に、長

東 魚= 矢作は一うちて、が、重苦しく響きすぎるやう
東 魚= 矢作は一うちて、が、重苦しく響きすぎるやう

(545) 鎌倉の代に喰ぬ鰹ふ

L

上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。 りしものなりと中しき、 は、此魚おのれら若かりし世までは、はかく 5 に へ出づること侍らざりき。 此頃もてなすもの 鎌倉の海に鰹といふ魚は、 = 「初鰹かまくらからの捨ことば」(武九)徒然草 也っそれも かやうのものも世の末になれば、 頭は下部もくはす切 かの境にはさうなきもの 鎌倉の年寄の申し侍り りてすて侍 しき人の前

▼ 魚 = 前句の響がなければ、何とも興のない句としか 乗 魚 = 前句の響がなければ、何とも興のない句としか で、下述を表出したのである 乗 魚 = 前句の響がなければ、何とも興のない句としか である 乗 魚 = 前句の響がなければ、何とも興のない句としか したのである

546 萱笠の加賀を通れは田うへ 笠

は足薪翁記 近江のも好まれたのである。 好みしゆ して國の名産の一つ。 いると、 省ニ=「菅笠で大にも族の暇乞」をして、 急、 田植笠にかぶつて居るのをみる。 に詳なり。「菅笠の加賀も近江も長閑にて」。 加賀笠と書るもの多くある敗」で、菅笠の事 「當時の人加賀の國 1 よりい 加賀にさしか 加賀菅笠と稱 づる物を

田植にも使用するといふのである。

かぬの は、 上が加賀の枕言葉風に調子良く聞えるせいであ 笠といふ字を二つも置いて、あまり耳障りに響

(547) 互 1= 笶 S そ * 0 文

に思ひ叶つて、今では文の當時を思出しては樂しく笑ふ。 である。 秋の屋=夫れまでは、互に袖を濡した事もある。 == そもくの文は、 時々よみ返しては感情をいらたどせてゐたが、遂 肌身放さず互に持つてゐたの

魚=「そも~の文」、實に巧い修辭である。

寒

所

0

多

L

經

記

僻地に ある。 記的に敷奇傳的に書きし特異な内容をもつ、遂に奥州其他 と讀むも、 省ニ=著者不詳八巻、足利時代の作。義經の事蹟を戰 (548) 遁れたのを、「寒い所」と云ひしもの、原句ギケイ 3 シツネキ或は義經物記其他の名が附せられて

有る。 秋の屋 吉野の山奥でも、雪を踏んで逃亡するところが

持ちの寒さもあらう。 事質の寒さもあり、 義經の不遇に同情される心

(549) = 沈 浮き沈みする人の身の行末の如く、質草も同情 h T は 5 < 質 0 未

> る。 だ。終には流れて行衛も 秋の屋 魚 人生如質草とでも云ふ可き敷 流れた果てを掘出したものにされ

ヽば結構

雨 風 1= かい き 廻 t れ T + = 月

風にかき廻された一年を思ひ浮べる。正しくそこに 省二二 (550) 十二月に差迫つた心身のあはたどしさよ。 一種 雨

師走氣分が濃厚だ。 二月に到つたといふのであ 秋の屋=一歳を悲風慘雨に悩まされ、 る。 而し 7 年の 終の

てしまつた、と云ふ人世のあわたじしさを顧た心持ち。 魚 雨だ風だ何んだかだと云ふ中に、 又師走になつ 22

(551)合 歡 0 葉 0 凉 L L 夜 き 握 IJ.

詰

平凡だ。 く。凉しい夜なれば握り詰めてゐるといふ感じの句なれど ども、握つたやうに看えぬ。此の形容はちと誇大である。 省ニーねむの葉は夕方から、 秋の屋 握りつめたやうに、 合敷の葉は、 夜間は合掌したやうにみえるけれ つぼんだ處に夜凉のひき締 しぼんでしまふ。 朝叉開

552 大 名 戾 IJ t U

つた心持ち

を味

ふのである。

なりし身變の激變に對し、 大名戻りなる特殊語はあらうか) 省 食事の時など(或は就床の折りなども)華やか しみんへ淋しさを覺ゆる。

に還つたのであらう。 秋の屋= 無からうと思ふ。御殿女中の暇を取つて、 自宅

の淋しさを、かく「箸」と云ひ現はしたのであらう。 魚=箸そのものを淋しがると云ふより、 食事 0

(553 子の口をふ さい た窓 ^ 顔 "

うな風をして。 塞ぐ、その窓には夫婦の顔が二つ、外を見るやうな見ぬや 省ニー外をみて子供が悪口がましい事をいふので口を

窓の前を通るのであらう。 したのを制して、其後から夫婦が額を出して看るのである 秋の屋= 小見が窓より外を通行する人をみて、 魚一子をたしなめて見てゐる窓を、 男女二人連れが 何か批

(554 通 ٤ 眉 0 下 る 關

顏、 にみたてる顔はほろにがし」(武六)。「關守はきたない面 ラが見事なり」(武八)などと品定めされてゐる句が多い。 武八)職掌柄甘くみられてはならぬ。通してしまへは元の 膠で付たやうな闘守」(武九)、「棒のやうなる闘守の聲」 元の聲、元の姿となる。 = 闘守は眉 つり上げて威儀を整へて居る。

> 秋の屋 富樫左衛門も、後には眉が下つた。

前の姿が、 可笑しく連想される。 眉の下るに、わざとらしく威儀を正してゐた寸

(555 家 督 0 献 仰 向 1= 寢

るやかに仰向になつてゐる。 省二二滿足、喜悅、 安神の態を示し得て居る。 心もゆ

秋の屋=心汎體胖。

對の心持ちである。 魚=「公事に出る夜はうつぶしに寝る」(武七)の Œ

鯨 0 õ そ き t 村 ימ 0 <

思ふ。原句は七郷浮ぶといふが、そんなでもない内實を語 れるものくやうにも書いてある。その捕鯨數に因ることと 繙くと、利潤のあるやうにも書いてあり、又安價に入札さ つたものではなきか。 あると謂ふ。「五島鯨も麻布七村」の句もある。色々古書を 省 二 諺に「鯨をつきあつれば七郷浮ぶ」、 大利益が (556)

利益の無いもので、骨折損の草臥儲だと他郷の やうに、漁夫が虚言を吐くといふ意かと思ふ。 秋の屋 鯨が捕れ、ば七郷が賑ふと云へど、 其實は餘 者が美まぬ

ゐて果れと云ふやうな事で、

資本家をつって置く、

どの浦 もくその通りに、といふのではないか。 魚=一疋捕れたとなりや七村も賑ふのだ。まア見て 大 40 委 睡 7 店 晦' 蓮 ス 任 繁 H 6 七 狀 は 昌 睽 ス げ 忘 カン き VC 礼 風 to 證 去 お 5 あ 淋 文 b 椀 22 を 友 T L \$ 替 0 要 < 3 書 な 猫 る ま 齊 見 世 0 n 世 5 III. 1) 也 W

111

和

柳

塔

路

郎

選

藤 此 村 墓 湯 車 村 處 0 石 0 0 は 子 0 Ш は 鼻 中 を を X 美 が 央 0 1

麻

生.

葭

75

郵 人 16 ボ L 淋 便 1 が 1 秋 局 L Ł 見 < 0 0 0 蚊 た to る 景 朓 K 福 久 無 秋 色 8 3 米 田 10 7 3 表 0 IE. Ш 雄 情 n 空 居 T 雨 樓

橋

本

綠

雨

5 胃

0

<

L

5

は

見

L

朝

霧

0

を あ

h i)

な

飲

8

82

奴

ま

た

IE.

直

な

事

す

る

0

ひらには

7

0

71

6

0

柔

3

吉

7 F

七

た

4,

IIII

を

拭

か

世

ば 返

手

H

を

L

壯:

陽

b

て

四

5

へろ足

n

ば飼 な

ひたきも

0

K

~ 甜

ル

2 T

+

猫

ス

3

1 0

1

0 あ

女

0 0

驱 を

な 見

\$

0

本

は 小

5

TI

7

あ 瞳 方

る

H

足

る L る Ľ

粉臭

き

から 情

tin

10

孤

獨

を き

8

75

L

淫

賣

婦

0

き

て

10

<

道

E

思

U

冬

0

糸省 生

0

赤

鼻 な 山

希洛

1

未

言ひ分

を

\$

0

T

靜

力

K

詑

び

T

る

る

淋 自 歸 つま 殺す えす L き C る 0 H \$ 眞 が 机 燃 似 世 0 文 事 80 む 7 \$ 7 き 奥 20 L を る た 樣 カン 0 7 增 文 对 カ 0 T 雁 4 お 位 3> 來 な 詑 紅. る 75 汀 b 柳

本 丹

路

落 街 各 角を 莫 20 Ł 0 2 氣 n T 儘 7 門 的 己 L < 礼 ま 兒 b K は 助 陽 風 < を 16 を は 見 な 10 L 4 L

名のと 疊 は ح 廣 が L 77 Ł 夜 Ł 具 2 鍋 下 手 本 な 111 感 シ 謝 狀 2

だ 若 L + Ŧi. 年 賦 0 家 喜 を 多 建 春 T

告 銀 あ -[1] 符 行 1 0 買 F よ 0 3. バ b 鎧 人 文 " 0 7 戶 6 慕 < を П な 見 2 b 0 0 to づ T 5 7 L 町 持 Ti. ま 0 六 0 富 T 日 Ch

秋

紀 太

春

元

雨 继

本

某 人

云ひ負けてならじこ ち 6

頃 8 逆 喫 ひ B 0 は H す 3

酬

\$

4

T

7

毛

す

保

險 0

屋 秋

IC

主 3.

人

主 け

人

Ł 70

あ

が

8

6

n ね

笑は 九 隣 7 赤ち 抱 カン ね ば な 6 82 事 Ł な

b

次男又病む(二 旬

級 长 K 運 動 會 は 見 る ば カン b

な さ 8 L は T 淋 注 び 射 L 勵 < げ IIJ ま 笑 L L T 酒 は 0 注 席 射

妹 尾 粉茶

來 世 T 7 思 * ひ 3 0 5 7 望 風 邪 4 を 10 引 7 き

人

4 子 0 手 K 0 \$ \$ 味 劣 親 Ł る 0 5 我 心 が な 4 ^ b 3. b 秋 b 送 き E な 0 る

醫

き

君

を

送

3

社

0

電

話

無

事

子

が

Ł

聞

き

取

6

n

案

Ш 者 82

る T 酒

長男を舉

すげし

ある 男

滿

+

年 H

生

き

た

が

肴

な

b

誕

生 儿

あ

か

Ł

公

會

堂

\$ 氣 嘘

+

月 す ち

神

前

K

<

E 金

ステ

IJ

今日

は

11 L 居

は

ぜ

が

K

入

5

花電車

見

0 好

高

夫 獨

Ł b

T る

0

を

持 10

話

き t

日 は

0

顏

翳 ず 惱 V

25

17

チ 職

チ

ヤ 家

米

重

3

ま な to

だ

知

6

藝 慰

瀆

C 0

は

稀

7.

煩

まだ二

時 0 יי

カン

咳

L

K

起

吉

夜

が

長

貧 床 儲

相 0 かい

な 軸 0

人 秋 T

VC 0 20

買

は ^ 此

礼 7

た 誰

手

相 來

水 ず

Ł る

巷 カン

\$

珠

西

村

明

町

力。

里

居し

ケ

月

菜

\$

大

葱

4

2

0

青

さ

溜め

T 0 清

庬

白 來

足

袋

C

來

た

V

な

慕

П

拾

は

n

K

滿

洲

1

行

<

ほ

力

10

な

L

廣島

浅野泉邸に

て〇二句 3

泉

邸 風

~

T

詩

10

L

む T

心 4

取

b

戾

L b

要

談

世

吳

0

K 1

水

兵

h

は

4

h

な

醉.

15

吳 灯

-

水 谷 鮎 美

生(十月 五日

人

人

死

h

だ

お

經

0

長

が

短

1) 力 存

自轉車 J おさな額 3 2 で 女愛子出 おぼ U < 0 ^ る 畫 7 Ł 寢 產 2 0 た 婆 ま 1) 0 < 85 よ 6 6 5 子 to -Co 0 き な L 桃 H

おとめ 箱 心 握 候 手 文 は 世 は 30 る 母 \$ 0 0 な ま b L

砚 陽

は

な

5

て

2

1

3

さ

す

6

77

82

子

0

す

きな鯛

0

8

だ

ま

が

灯

IC

5

2

き

颯 金

から

出

來

礼

ば

人

は

直

4

10

死

ね

綠 之

助

尼

刑

務

7 野 出 思 15 球 棺 CA × 出 中 VC ル ン汚 際 は 斷 株 L 不 n h 屋 7 た 0 C 屋 鎚 别 方 根 は 0 n ~ to ホ F 晋 " 事 b が ば Ł T か す す < る 3 3

ふと見 爽 Ł 礼 飲 ば み 霊 K 10 來 8 た 主 0 義 0 は あ 運 る 轉 如 手 L

所 が 安 1 働 < 0 10 b

1/1 澤 濁

水

0 0 置 th 猪 名 3 を 口 刺 器 \$ 0 尺 C. あ 虚 な 平 無 Th V 僧 K 方 Ł 飲 2 VC 遠 ま 紙 慮 to さ 芝 Ŧi. 世 礼 圓 る 居 す

水

國

澤

ŽI.

万

2

0

る

買 銘 3 人 和 動 家 理 路 六 カン 東 朝 CA 打 を < 學 物 尚 髪 次 西 人 L 風 被 0 持 秋の な Ł 園 店 を 4 4 屋 呂 3 た 0 動 事 親 T 菊 臨 出 明 子 札 を 2 女 物 云 0 算 を 園 時 る が 家 H 80 Ł 流 給 は 虚 盤 見 迄 主 0 3 以 K 永 雇 あ 榮 IC 85 づ 0 は 豫 5 \$ F 才 0 0 男 心 1 き 洋 株 定 湯 Ł 田 10 ば 0 tc 20 装 誰 式 を VC は ~ 舍 L 出 用 な カン 經 人 振 る 頭 \$ 會 爪 朝 た 平 Ł b b が b 本 \$ H が 養 社: で 子 は K 向 田 非 あ 讀 知 居 な 低 は な 彈 煩 17 知 カン b b b 新 n 7 る 亦 b L する b き 惱 春 水 光

火事 子 御 狹 浅 生. 人 晚 公 IE. 結 夜 金 溜め 間 き 情 を 婦 V 人 直 局 0 たぎ 秋 4 家 L 字 を 人 Ł は は 電 てしよ 17 P 引 る VC 子 5 冷 L 都 女 話 10 Ł 酒 供 葬 立: た 淋 T 會 給 母 0 持 ち 云 0 儀 身 0 は は < 0 0 L 0 的 話 會 3 世 言 カュ 取 提 風 側 さ 人 大 を 社 な 葉 な 次 灯 邪 2 聞 物 < で で V 世 は 0 ぎ は を 泣 L 力 子 型 to n 儲 邪 は 冷 物 引 西 後 き T V 雕 た t け VC 大 白 た が で 寢 < が T 藤 考 n 生. る 出 理 な 入 染 過 de 5 6 20 t る n 氣 來 石 n 髪 ぎ 青 b ず る do

を

兒

手 も

ては秋

はヂ

0

が

告

力

任

2

<

見

助

3

秋

0

末

鋪

T

きら打

80

10

近

by +

披

露

H

の洗

髷げ

から

出场

來き

芋 懺 燻 10 競 恐 1 子 な 2 見 0 心 賣 九 畑 0 17 舞 た 持 K 人 0 飛 笑 る を歩 我 門丁 行 VC ち な る 額 2 機 行 Ł る 頭 人 夢 から Ł る 3. カン は Ł .L 0 0 4 蒙 H 1º 6 身 発 は あ 深 な 10 を 0 許 知 17 Ł 0 3 け 他 * 6 チ カン 2 VC 誇 證 n 人 す 20 0 1) 6 E る ば ラ 炭 新 步 る 姬 感 な 庭 法 カン 家 が 謝 を 4 6 V が 見 b 4 ナ 賞 傅 施 刎 な 落 聽 な 111b + 藥 8 b V 4 3 吉 術 ね 間

晋

No. 外 7. 点 淋 欝 通 官 暇 0 しさ 勤 廳 す 交 澤 J. 人 惛 0 0 VC Ш 0 な 82 0 0 を を 容 2 花 2 T 疲 丈 晴 け 氣 今 は 0 6 0 n h b な 煙 日 vý L ま 男 が 信 野 た 1 親 ボ 草 E 用 男 僕 友 0 旅 1 心 IC 2 10 を 0 0 は L あ 6 を 5 拾 1) 膝 弔 Ł 信 出 弱 ほ・ る 村 遲 T 經 辭 た < ば L が 礼 Ł 刻 を 松 書 出 切 す か す 力 讀 4 夢 朝 3 5 H 1) 3 る b る 裡

須

崎

17

秋

そ食

う 堂

つサ

し如

まく

ひ運

0 3

手

b

な

話

がれ車

あんレ

るのビ

0 0 -

手ちの

を

信

切懐な

0

廣

.原

都

會

人

大

鹤

喜

由

盛 ひ とに イ 1) E 場 道 ル を 2 教 折 85 ~ n 7 0 T Ŧi. < 子 尺 L 0 VC T 數 ま 乘 露 だ b 路 足 す 0 6 2 數 ず

12 大 で 西 Vo 八

戀

愛

は

· C

v

1

2

む

る

言

Ł

T

<

き

82

は思出

北

た ガ

ル

1

ブ

が

狹

5

話

1

拾 朝

寒

を

0

き

1)

くならた

5

T

な

Ł

20 25

はさ

-1-

る

方

10

硘 7

0

T

AHE. ほ 0

事 12

10 T

る る 味

賃

-

階

で

大

零

b

曾

我

部

容 明

> 古 意

本 識

屋 --

ま・正

デ・重

3

3

を

1:

げ かい

> 冬 が

> > 外 慰 己 耳 が 力。 人 言 3 0 葉 腕 b 葉 10 10 女 己 身 0 が を 耳 言 無 寄 を 葉 す 4 女 だ 酒 K 女 0 6 な 0 泣 K 1 82 す

Ti 崎 柳

見 世 T 蚊 帳 0 皺 石

石 國勢 0 調査 は 0 0 は 數 な 6 -30

る 恩 赤 師 7. 0 著 0 書 -人 0 價 僕 0 から 安 居 き る

ili 場 沒 食 7.

らし 遂 診 事 10 K な は 0 來 思 嫁 T き 7 à. 暇 迡 貰 告 ま げ 12 U Ľ

4 胸 七 起 水

男

安

奉

公

Ł

見

7

Ł

i 藝 き 0 鳴

82

射 + 親 酒

場 月

0 ま 10

娘 たき

10

手 ル 機 宿

を

30 Ł 吊

當 己

て

Ł 油 た

V 聖

E

to VC

姉 あ

者 12 游

-: 的

往 4

馬

塵

阿

呆

肴

明

H

0

儿 波

E

利

島市 秋 僞 左 红 賴 嫁 刑 111 り來て 継ひ Ł は 持 警 遷 事 母: 1 1: to 者 Ł 學 + 派 L 稀 高地 10 汲む き 礼 t は が 82 短 2 豪 水 y 違 婆 10 テ 氣 な 知 氣 は 奢 靴 安 前 6 を 水 3 な ね 流 選 音 さ 0 82 H な 12 0 12 舉 CA 靴 子 世 \$ か る < + が 供 はず 6 K 10 ~ 1) Th 連 き I ~ 八 な 茶 3 人 Ti = ば 町 石 ナ 米 が n 植 か 0 本 で む 若 たき Ł x 車 カン き 田 曾 鴨 田 111 な 洗 逢 病 夫 ち ル 0 Ł 根 ま N だ b き 2 7 笛 美 婦 T 九 U 承 3 民 笑 天 郎 る 春 何を 磯 别 埃 洗 貞 覗 H 古 ほ J. 0 力 本 3 操 12 3. 面 には 否 力 礼 屋 醉 來 け 器 を T 勝 T ば 湯 花 丽 Th 根 知 て 我 氣 宿 0 2 6 氣 ホ \$ 鉢 b 月 < あ ラ b 82 Ł 枯 Ŧi. < E 6 L 7) ヂ b 野 圓 \$ は 步 メ ~ 松 才 0 母 着 知 5 4 0 ラ を 0 T 萬 慕 肥 10 [1] 6 燃 0 カン 年 奥 歸 青 竹 る 平 後 宫 な ゆ 納 b せ ざ 有 青 る 1 2 非 代 る 內 8 野 木 藤 b な な 難 0 力 6 6 2 ~ 機 脚 大 白 禿 き 1) 史 L 2 n る 世 7 = 見 女 郎 呂 客 山 朗



珠·春秋論

福田山雨樓

仲よく精進する姿は羨ましく又與床しき限りである。 テニスのダブルスのやらに、最もよきパートナーとなつて と信じてゐる、 意味に於ても兩君は典型的な作家だと思ふ。病氣しても愛 動的な創作態度を必要とする詩だと思つてゐるが、 ものでなく、涙を吞み込んで叫ぶといつたやうな進取的能 知れぬ創作力を湛えてゐる。僕は川柳は積極的な詩である んどない。それほど創作に熱心であり忠實である。實に與 きたしゆ を失ってもその創作力は反撥して止まないのだ。更にこ 二人は相提携し、 月 なの んじゆう・この兩君の作品が出てゐないことは殆 「川柳塔」 涙が出て來てから唄ふやうな手温い悠長な 激勵し合つて健吟を競つてゐる。 を繰つて見ると、ニシムラメイジユ 斯様な 恰度

> 6 を示してゐることは興味深いと思ふ。 弟たり難き二人が、 兄分である。 頃から川柳に手を染めてゐる。 く考察を進めやう。 田 中凡骨と號して活躍してをり、 (共に本社戸籍調べに依る 句の上においていみじくも個性の圓光 かし年配は明 明珠君は昭 以下句について少し この兄たり難 珠 君 和三年の が二つ

これは兩君の自信句であるが、 とりかへたレースカーテン寝てながめ 慰める人 病夫を養ふ女給とは知 食ふ足しにする鷄がす **淚金子供を負ふ** て、 後者には温い人間味が籠つてゐる。 淚 7 から 取 落 b ち 6 な 17 10 る 前者に < 8 九 る る 0 暗い人生觀がある この傾向は 同 同 明 明 春 珠 秋珠

111

柳家としては春秋君の方が古く既に大正十二年の頃か

作

家

であ

這

ひを幸

福らしく見

0

23

6

n

明

珠

表

札

を

顟

で

見

ゆ

<

郵

便

屋

錢湯 言ひ 戀でなし笑ふ女給 网 狂 信 人を 隣 がさめて蚊帳の 心 課も ことり C IC なだめるやう 桶 凝 すら るなきつ を b Ł 8 5 天井 とわ 5 5 七 VC te H 蹴 IC 云 た 82 82 る 3. 他 + る T 5 な 4 たぎ 國 2 月 步 る 17 同 III 谷 [1] 秋

さに

П

きけ

る

0

\$

年

0

世

中の ると、 珠 を思ひ浮べる 君 VC は武 「柳樽 は 會批 か 玉川 きり て川 VC と人生描寫 には批評 張 0 出 1) である。 7 村花菱氏 で る あ があ る。 る 5 即 が本誌 更に是等 柳樽と武 ち 武 存 配和四 玉川 秋 君は 0 玉川 に描寫がある」 旬 柳柳向 年 0 K 0 113 就 新 臓 ての きであ 年號 を 打診. 斷 へ書 0 0 L 言葉 カン 7 0 明 n

を 飽 なす 今は H 監督に許 ボ まんざ 、迄春 1 前 告 持奥 2 ナ 1 秋 高 ス 式 七 は 屋 田 カラ 7 た ち バ 知 が盛り ス 7 P 6 0 1 んと ん顔 ーで 7 馬 チ 押し切 場 L. 來 1 だ L つてゐることは賴 7 T な 口 0 電 75 る洋服 つて 繪 喫 Ł 車 茶 思 10 る る。 25 店 74 屋 25 L 母 カン しく有 \$ 同 同 Ti III 柳 秋 0 難 去 中

> 子がをます ささに 値 が 1: K っさか 手 i) 米 箱 5 屋 C Ł 云 は 4 靜 覗 ば 許 力 き され な to る b L 同 同

4 てゐることは、 に富み、 にはその 着眼 を約 滲み出 を見るやう 武器 x なる。 0 束 中 1 介付け 6 天才を求むる所以は茲に 0 る、 2 あ 適 錐 明 2 珠君 春秋 性を は鋭 0 6 冷 にまざく と云ふ個性を た。 n 徹 共に 君 きが 備 が眞實を穿 た文學であ な眞 が たも III 故 實 1 柳家とし 1 VC さ 刺 が句 通 七 のでなくて 映 る。 アを愛する すし る。 つ心と人生 じた人 0 ある。 背後 ある 7 表 0 0 で 現 生 は フ 0 あ 力 聖者のやう 面 描 心と社 表 此 銳 п る 6 が、 迫る 寫 故 が、 2 面 角 トに出 0 に川 的 に浮び出 恰 天賦 を III 0 \$ 會 批 な 柳作家たる 尊 柳 を 士: 判 る に恵まれ \$ 覺 風 4 層 ええる。 丰 何 0 亦 0 所 銳 から 斷 謂 t 面

春 奉公に 洗はず 秋 君の h 2 客觀的 b K やるとい と女給 體 操 を 批 は 評 IC す 嘘 眼 九 て寝 を開 る は 社: 畫 カン た 會 子 0 世 0 多方 風 カン H な b 占 面 K 豆 0 同 おり 秋

0

との 斯 う云 出 一來ない 3. 句 のは、 を 探 世 女性 ば 5 に對し くら で \$ ての觀察であ あ る が 茲 るの K 閑 殊に玄人 却 す る

やうだ。

IC さうで 0 5 T ある 佳 句 が、 が 多 旬 V 0 0 多樣性 噂 K 聞 がこ H ば れを雄 君 は 仲 辯 2 苦勞を K 物 語つてゐる 常 8 T 來

賣れ 77. 蒟 あ 基 别 浪 よしきたと若 お あ 女 た 一月 んな奴 房 のも は仲々強い 嬪 ばあさん咳入る煙草やめ V カュ 化 まい ささず はすぐあ 82 0 妓と賣 この頃 つお前の しく柱 0 節 屋腕を かと女 K 樣 16. 5 酌 が さうであ とからと る 九 n こともそ V 云ふて る女湯 が利 ぬ妓夢 いでく 內 女 捲 女 體 0 10 0 いて居てくれる るが よくし 仲 75 b 7 n 使 0 低· 居 は 6 話 女 賣 \$ る 82 將 4 χĖ. な 思 n 山 n す 75 棋 る 1) 婦 -3 3 n 74 0 苦 彻 0 [1] [ri] [17] hi hil hi Til ti 春 秋 秋

などは

0

眞

一門頂

してねやう。

明

珠

君 [1]

VC 君

は家庭 た子の

特

に子供 を示

の真

質を詠 が

ナギ

何

から

叱

られ

讀

節

0

珠

水

粉

樂

3 方

7-K

迫

b 寺 h

ス

トライ

ク・ワ

ンと父親らけてやり

くつろいだ筈

0) 寒

背中

~

7

がも VC

to

n

[ii] lii 明

[ii]

勉強を 母 子 本 もうこ が 願 親 摘 あつて子のある役 が 寺 7 させ様 母 んな事を知つ 出 K 出 T 行た た 座 Ł 母 親 後 n L 力 陽 ば T T 0 をス る子 廣 雲 腹 VC 3 を す K 4 が とは 1 き V. 見 17 1 ち る る 3 同 同 同 [11]

るが、 るい とが出 て獲 せられた。 盛なる作 見ると、 盃. 忘年大會 て非凡なる手腕を有することはこの が授具 てゐる。 昭 得 ほと化し、 和 あつ 來る。 儿 することと が道 何 輝かし さ 年 全く一 令間 はれ れることになつた。 +-0 叉同 力が見事榮冠を捷ち 頓 堀 月 もも代さんもかつて 天才作家として屋々 5 P 家こぞつて川 なり 彼の がて 六日 君の令息英 倶樂部で 神戶 優勝 颱 恒 風 例 支部 開 盃はわ 0 ___ 入彦君は 過披 催された際、 本 出 社 を 柳家であ 得たの 狂 が 講 席者百 京阪神各支部聯合、 まだ十 喜せ 明 が濟 一事をも 「近作柳樽 光耀抄山 珠 L + る である。 君 h 最 8 が最高點者とし でさて採 -六名、 高 歲 た。 つても -點者 0 日頃 欄 作家とし 佳 15 に見 年であ 知るこ 點 作 K 11] を見 0 L 句 優 III 勝 柳 宏 HE 0

二人の親密ぶり る。 此 n 就職をしたか此 0 は春秋君が 下五. に千萬 8 源を 推して知るべしである。 無量 均 流 來 0 さんは 友情が籠 7 かり < \$2 VC つてゐると云ふのだ。 す L て喜 しかもこれ h 明 だ何 珠 であ

何 塘

> 4 自

1)

が Th

1) 律 4

0

场 から

V

1m: 6

殘特木で大

本に句あ阪

催川集る帝 少柳は °國

個少至急申込みを ので自然。IOO員) ので自然。IOO員) の自然。IOO員)

生

れ

た異色あ

111

柳

句

あめる

れ頒が

布阪

す大

る川

こ柳

と食にに

し調

H III

律 柳

を を

似

自

n 1:

は げ る 7

質

柳 b

4 俳

近

來 文

JII

柳 が to

DI

外

0

0

押

L

5

とし 的 0

13

L

を

2

5

2

7

6

1

L

K

IC

17

阪

1

都

會

風

學 越

0

素

養 L

あ カ

0

脏 かっ

を

4 \$1

20

11 11

俳 n

何 で 0

心

な

寄

世 者 眞

1)

+ 1

る

兀

家 が

ち

1 K 本 4

v. 走

る

是等は憐

れむ

き

性

格

破 柳 詩 柳 VT

産者と云ふの

外

は

な 見受け b III

0

浴 ÷ かい + 2 味 觀 以 八 曹 L: 句 2 んる滋味 或 作 力。 な句 77 L 人 1-は 省 0 六 を 苦 祭 \$ 句 0 8 身 惱 風 男 邊 0 埶 0 [1] 意 雜 脉 傾向 句 事 喽 あ な が 4 を る 0 作 111 抄 力 だ < 柳 家 7 か な K だ 1 6 6 托 H 嬉 5 VC 0 L に L る to き 反 5 16 對 春 C 0 VC 秋 は 统 明 君 别 な 珠 10 L bo 君 \$ T カン 述 0 近 VC 内 來 \$ 省 た 的

> 礎 何

J: 2

IC

V. 古

5

6 本 道

ざる

懷

疑

冒 5 返 性

ま 20

個 0

性 だ。

を

揚

て、

2

倦 迷

3

る 健

4

L

事

敬慕

柳

こざる

得 本

な

5

网

8 振

蝕

10

C

を 0

磨

安 珠

澄

ま 你

0

軌

雅

4 L

る

姿 君

2

1111

秋

MI

名

が

きに、

カジ 進

じって

個

0

眞

to 見受 り n

節 1 É さぶ 溜息 廣 ば 列回 役 粉 V ĩ | 空打 人 0 を 2 を さは 金 書 0 0 1 7 を 寢 H 俺 が 3. 0 本 7 VC 25 ば Ch 8 さ カン 25 Ł 今 から to 打 ま る ね た 1 夜 母: 1 0 き 0 n to 示 4 た 0 Ł T ま 才 炒 " 叱 神 [:] 1 0 25 F Ł 去 ほ 6 を UF < 負 丰 INF. 聞 4 n 0 75: る 6 的 き 17 17 20 [1] 明 同 同 [ii] 春 珠 秋

> 牛 路 郎 編 著 . 柴 舟 漫 畵

1/4

幸

本 拍 となく、 0 雄

祈 車

る 本

8

0 1 飽

C b

あ

る。 h C. る

10 2 石

加

オレ

こと

を

[] 發

す

る。

切

K 0) 8

网

君 ま 蒙 は を 0

0

在 創

大 びで川 111 一幅柳 柳 でんのあで妙り 會 る碎味点 編 といを *0 纂 はて骨 著摺を ŭ . 者り折 100 路 の餌ら 序にず 郎 序 のた味 -00 Q. 節がて で「賞ふ る卵つ

圓壹價頒

000 \$ 遊り

圓壹價定 錢拾八價特 錢六費送

所行發 洞朽

出玉區成西市阪大 地六三目丁三通本

たかて 集 錢六費送 二九三〇三阪大替振 九七五二屋茶下天話電



りいが暇の羅比金るすを行孝 明 容

金

比

羅

寄 新 + 金 金 繒馬堂に金 麦 比 進 八 比 丁 羅 羅 石 0 教 阪 は から 自 比 0 屬 あ 國 羅 る +: 臭 b 0 6 だ 產 V 仕 H 手 合 代 K 6 を C 前 \$ 氣 せ 拜 拾 0 0 が ま な U が 寄 疲 礼 松 讀 あ 林 る 2 附 b n 都留 法 青 時 紫 豆 笑子 雨樓

秋 香 逸

村

前 田 五 健 選 並

四國

0

柳所

拜 旭 な 奥 金 息 諸 25 金 團 金 零 金 氣 1 國 0 殿 社 下 0 比 比 體 比 平 比 E 5 カン ~ 0 b 院 羅 1 羅 旗 羅 0 羅 6 b ル は ま 0 ~ 金 0 护 H To 急: 前 0 金 脊 な C 浙 比 な は 温 る ぎ 金 比 V な 0 守 3 羅 札 追 路 審 -0 0 羅 石 體 里 -7 女 樣 錢 IC 手 姿 詣 參 ま 階 象 E 0 段 は 杯 程 世 を 0 b 0 \$ t き 頭 叔 鼻 點 0 K る to 1) 登 X 支 3 8 父 Ш 金 背 5 呼 宇 妻: 遭 那 1) け T K を. 比 U. 7 來 1) な 0 難 銀 0 ま あ 浲 F 羅 行 VC る b 札 足 記 社 來 告 貨 85 V b 77 柳 葉 時 亂 th H 柳 柳 狸 美 水 木 靈 暁 陸樓 雨樓 0 津 公三 石 紫 光 丸 夢 狂 客 履 7. 1 童

0

2

1)

繪

馬

堂

-

H

寸:

0

油

軍

1:

官

な

b

輝

親

颱

力。

h

3

L

0

如

1

花

さ

1

象

Ш

Fi.

健

所 名 本 E

(六) (五)

DU

或

0

彩

選

者

前

田

Ti

健

氏

屋 道 宛先本社 後 溫 事務所 泉 島 × 用紙 切 切 + 二月 ガキに限る 月 =+ 二十

H

日

]]] 柳 女 募 3

物

風 萬と 海 座 殿 琴平 内に治 Ш は上 は 0 稱 大 は 老樹欝蒼として神苑廣く殿字廣大華麗にして神 町 かせら 古に属 己貴命、 11 れ海難守護神として航海者 象 V 頭 金比羅の K れてる。 14 四時賽客が絶えず、 12 し歴朝皇室の崇敬厚く今國幣中 金 相 南 IJ, 殿は崇徳天皇を奉祀さ 比 概 参詣 略 羅 者 3 の多きは か h 0 信 华 仰厚 什 忙 0 れ、 勢大廟に次ぐ 麥 L 計 社 Æ 者 殿 祭 神社 あ 0 威 鎮

Щ	無	青	媛	Щ	化	Ш	江	0	Ш	白	Л	Щ	鳳	Щ	朱
				柳		柳	戶				柳	柳			
	頓			3		<	鹿		柳	楊		漫		柳	羅
				ん						(は と	0	畵			741.
				K		5	0			こやなざ	0	懐			
初p	着	蛙	柳	ち	柳	ま	子	L	詩	ぎ)	眼	手		村	宇
全	第一	創刊	創刊	第	第	0	第	第一	第	第	第	仝	第	第	第
册	集	號	號	貌	號	=	輫	號	號	號	號	册	號	號	號
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		同		同	同
七月	Ξi.	五月	PH	四日	=	三月	月二	二月	二月	一月	月十 年	十月二	月日	十二月	-1-
-	н	H	н	Ξ	- 11	=	大	Ji.	H		辛	五五	不	一 六八	H
日	B	,	H	⊕ ∏	H	(H	Ĥ	Ĥ) H	H	100	Ĥ	明	$\widehat{\Pi}$	$\widehat{\Pi}$
山梨縣北巨摩郡多摩村、玉川柳會丸茂孤月發行、四六判十二頁	用坊 贅野	人口	未調、窪田而笑子追悼の百號で廢刊	菊判、昭和十年三月廿六日深澤奈の字氏腦溢血症以來休刊 甲府橋町川柳山日吟社發行、四六判八頁、昭和六年二月號より	十六頁位十六百分一月廿日の九號以下不明、外山雹六個人發行、四六半十一年十一月廿日の九號以下不明、外山雹六個人發行、四六半大連市大山通二の五六、棒色川柳社發行、大連柳界初期の柳誌	東京、淺草壽町川柳くらま吟社發行、七號を出して休刊	一府年三日	刊期不明	正十一年六月の九號にて休刊京、下澁谷川柳詩社發行、表紙柄井の紋	年七月廿日、四の六號限廢販市西區春日出町四八、内	を出して体刊	三年六月五日川柳ふところ手として大阪及東京の奎文堂發行、麻生路郎氏著	次刊行、印刷版、本堅地川柳社發行 一次は約十五號刊行謄寫版、桑島盧王人個人誌、昭	十四日二號同型	「川柳室積」の前身、礒部孔雀個人發行 山口縣室積町岬川柳社發行、 菊四半截活版十二頁、 七號で終

0								_			_					
久	加品	夢	٤	自	蛇	^	鵙	傘さ		Ш	花	H	黄	み	評	類題
良		0	コバ		0	なぶ		みだれ	Ш	柳	が	味		を	釋川	Щ
岐	0		工		目	b	0	吟社	柳	L				0	柳	柳名
社柳		小	會		傘	と		第一回	春	づは	た	だ		<	妙句	句評
報	泡	夜	報	曲	集	柳	耳	會報	膊	た	み	机	塵	L	選	釋
-22	創刊	創刊	第一	第一	-	第一	第一	第一	全一	創刊	全一	第一	第一	第三	全一	全一
	號	號	號	號		號	號	號	册	號	册	輯	號	號	册	册
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十月十	十月	十月二十	九月十	九月十	九月	九月	夏	八	八月十	-t	-L:	七月二十	七月二	七月二	七月二	七月二
E)	H	四日)	五日	五日)	H	Ĥ	J	月	H	H	H	六日)	十日)	十日)	十日)	十
東京、九段、川柳久良岐社印行、一枚刷	は「あしかに」を出す、吟社創立大正六年七月、回覽誌を發行横濱市山下町蘆蟹吟社發行、四六横廿四頁、一號限、十二年に	「ヒコバエ」の改題、すべて前項参照	の小夜」と改題、十二三號にて休川縣羽昨町ひこばえ川柳社發行、	正十年十二月廿五日發行、五號で終刊 澤市九人橋下通三の一、自由川柳社發行、菊判十四頁	五月十五日、第二輯の一を出し、あと出ず、大正十年、京橋さみだれ吟社發行、石版刷二葉乃至四葉、大正十	限り休刊、稻津松千代氏主宰	で絶判の少	社、半	は、川柳春雨俱樂部と改稱甲府川柳園續春雨傘刊行會發行、此書發行と共に、甲府川柳園	月まで繼川	東京、深川三友會發行、掬水竹友の立机句集、菊半五十二頁		横山縣岡	、初號終號未調 下西區八條通北小路八、吉川啞人方以交會發行、四六橫	堂で川柳難句釋、四二年如山堂で評釋川柳難句選と云た町田書店發行、秋の屋主人著、菊半二○六頁、明治三二	釋川柳名句選の名で出たもの東京、四谷區麹町十三丁目十四、町田書店發行、鳥崎松琴著、東京、四谷區麹町十三丁目十四、町田書店發行、鳥崎松琴著、東京、四谷區麹町十三丁目十四、町田書店發行、鳥崎松琴著、

表年柳川の後以治明 所藏日錄 によって刊行されたが、本書はその續篇で 東京帝國大學法學部所屬明治新聞雜誌文庫 III 柳 灰 改 p 未 新 「訂正」 東 東天紅」が昭和五年七月瀬木博尚 ま 柳 天 刊 治新聞雜誌文庫所藏目錄 九 歲 E 神 下 月 た 紅 號 紹 第 水 時 (續 カン < 1 ン坊句集」より以下は大正 號と何れも挿入の ネ ン報」と「獨活」は 矢 記 芽 L = 樂 第 創 第 第 全 全 刊 八 = --人社、 郵 號 號 册 册 4 號 ある。(非賣品) 南 稅 0 生方敏郎執筆編輯 ~ 同 同 同 同 同 同 27 七年の分。「土國子」の下へ第 毎月 錢 東京市杉並區高圓寺五〇八〇六古人今 十二 -1-古 獨活 + 1 月 月 H + 一十六日 H 11 月 回 未詳 號 Hi. 生 月 月 H H 日發 一人舞臺の四六倍判四頁 Л 方 # 紙十頁、休刊 語島縣石城郡 東京、京橋區本 11 十號位で 判積級、深 Ŧi. 敏 時後玉縣川 H 定價一部十錢 郎 福島縣となる 記標名句に 編 號、 廢學 明川 橋 刊校 治區 南 輯 内 鞘 た死人 山陰川柳の下へ、三ノ六(七月十日)、「舞姫 町 器 4 わ ま か 覗いて見たまへ、 といさくか心配でもある。 むの名 強行所は滿洲國撫順東八條通 洲へ行かない。 の裏表が判る。 た 二月號を出して、謄 \$ 月東陽出 椅子に凭れて紅茶を啜りながら樂々と滿洲 + か 0 吟社 月刊滿洲社(振替口座大連四七〇二番 集丸、 綿引方 III 一讀賣新 大昭 正和 十九 柳 滿 發 行、 社 で休刊? 术 發 昭和能因法師が出はしないか こんな面白い本が出來ると滿 洲 年八月二十一日限り、 行、 ブ 聞橫 社發行ので 一枚折、 ラ 定價は一部 社 4 異 紙 發 紙 枝 14 行、 今 嘘と思ふなら 聞 は珍品 9 折 讓怪 折 受發行再出步著、三 折 四 葉 活 六 圓半。 表 行 再 五 版 五 版 夫 判

者

4

版

刷

型

和

15

なる

句共

をしついけて

此の世へ舉げる第一

みの苦しみ

まる

晝夜

布團

轉がる鈍い音と共にギヤア

ま

らわし、

まづ

はリ

大元帥陛下けふ

死 太靜 0

光 井 春 平

かたまりが、 のうちに九百 それでも鶏明 た妻の陣痛 を移してくれ まで神經衰弱 傍にゐる僕に 十匁の肉の 17 きは、 てゐたからとて、心中記事はあと たやうな煽情的なみだしで綴られ あつてみれば、たとひそれが『解 喜びのうちに、 みも打ち忘れ、父となった責任と でけて伸びなくなった十指のいた ぬ哀愁に悲戀の一刺し!! といつ 徹夜して妻の腰骨を押しつ 疊へ擴げた朝刊で

摩、僕にとつては最初の子が 聲を聞いたと 0 見直す彼の驚くべき思ひ切つた死 山津の心中事件だよュッえッ、あ けさの静太の記事見たか。あの片 を綴つたものと知らねばこその わが盟友、 もの――あ」、その心中記事が、 送に聖代の永久を讃へたいといふ しく軍に御下問を賜ふ御勇姿の電 助乗の陛下が秋晴れの 職原に、親 兵式の記事の方へ、そして白馬御 精鋭を御親限" 場面。 記事が』と唾をごつくり、 ひるすぎ、 石森靜太の最後の消息 與三郎が"兄さん、 といった晴 れの 今更 觀

どの

が目にちらつくのだ。それは 6 瞼の裏にはつい五日前の彼の姿 あの静太が、 とも思ひつム熱くなつた僕 とも思ひ、 静太だ

彼が僕に贈つてくれた部吟 ことしの春、 わらつて 私が結婚したとき

> 費發行誌「橇」の第二卷第三號な も共鳴するもの少く、 が當時の静太の句風には僕はどう いかにも 春の星 靜 太好 ふた 歩くことにする ひかの 句ではある 殊に彼の自

えたの さへ敢て川柳を捨てると宣言し、 て淋しかつた。 全く柳界への消息を絕つごとく見 に、彼は「橇」を廢刊し、 ふのではなからうかとさへ思はれ は僕の觀賞範圍の圏外へいつて了 はいません」を見たときは、彼の句 「葉櫻 雲を生みそしてうみきみ 俄然その月の終り あまつ

3 現を信じ、 時は昔の彼に歸つて しかし、 しかも再び彼 僕は靜太の柳界 が目 見得 0 再

櫻ンぼ掌にころくと君思ふ

といったい 0 の共感する句を作って欲しいと希 彼獨特の、 しかし僕等

粒

k 集

富 1: 野 鞍

馬

0 V. 姿

> 0 か

照 -

明

は

青

花

柳

幕

優

ば

カン

が ~ b あ き 0 0 新 T か 派 t 十 L 罄 劇

賞 病

與

氣

L 金 郎 は

T J: 六 女

前 K

0 は

男 J:

を

思

TA

出

勝

太

+

餘

州

ふたりの家です

したがつて、彼がその後、

П

な

-42

包

裝

紙

S

0

カン

IC

命

3

皺

を

0

死

K

ぎ

b

を

賞

8

6

n

T

25

る

不

倖

死

額

0

佛

6

L

3

を

<

E

1

六

ひ

世

0 1

中 E

を 1

力

から

82

ま」に

30 3

+ は

ズ

K

馴

n

ル

脇

目

を

振

損

0

P

5

长

L

7

は

4

は

b

E

0

7.

4

П

答

泣

カ

n

to

は

女

助

17

7

力

6

0

2

Ł

絕

筆

IC

な

る

Ł

は

知

6

一

筂

棄

T

秋のネオンよ失戀してます 義足音して趣味の會です 死

h

7

2

2

至

1-

0

戀

Ł

人

は

云

3

忘 礼 中 5 VC \$ 見 6 n T 無 帽 主 義

我 童 曾 我 + 郎

0 1 3. 0 學 悟 は 清 V 手 を 合 L

りと

彼の歸りを待ち詫びた、

果然

歸阪後の姿を最初に現はした、

4

临 柳

長

ち十

一月

八日の道頓堀支部更生

何 即

彼は遅れ

走せに馳せつけ

作ら

秀

入選七句、

その

スタンプ狂へラくく笑つ

て歸るなり

ま」に 隣して 待つべしと心竊かに喜んだ。 らせて てといふ「とびた」の大門をくじ 生ぶりは、 などの句を聞いたとき、静太の からも彼を手離したくなかった " n いつぞやの夜のやうに僕等 紅暾光の茶を喫し、 プで彼を生まれてはじめ この夜を基點に期して 宴果て 再

射的場見知つた人が おどろけばこくはきれ 灯がとも V な

不夜城

ぶらり來る

ケ月に亘

つて四國巡禮の旅

15

7)

根 山を退院

たと聞

いたときは、

機こそ

來れ 0

りが、そしていでゆの宿々の白い十一日の夕べ片山津温泉の湯けむ十一日の夕べ片山津温泉の湯けむ 実施さして 失禮さして 障子が斜点 ひとり しまつたまんま、袂をひるがへしつい、「あゝそうですか」で離して 强ひて止めなかつたかと残念に思 しまったまんま、 ふの彼の語氣の强さに釣られ さてこゝらで引返してと つけぬといふので、 夜の幹事である為、すぐにはぶら たが、グループの一 0 から東へ恰度日本橋の て待つてゐようと、 **気分を今夜も味はさらとは思つ** 此して冷 禮さしてい 0 刻な顔になった静太の唇 たく たの 與三郎芝居めいて來 沙 陽に染まる空氣 女を道連に、 今から思つてどうし たどきます』との はル なつて了つた。 僕今夜はこれ そこいらを 袂まで 道頓堀を 思ふ途端 史呂が當 中 1 て、 を 西

を長く引 僕等の

棚

へ「静太句集」を造し

かな銀

迫割、袈裟掛の岩衣掛の岩、金剛界峰、胎蔵 が有る、大莊巖は一の迫割、二の迫割、三の この山を海岸山と呼んで居るのにも面白い話 岩屋寺の屋根振り仰 ぎ 肌 に東



國 遍 · 路 (其の六)

UL

松 山 酒 井 大 樓

界峰、 を浪とたとへむ」と有る其の通り實に凡處な 生じたので有るとの事。 る景色ではないので、海岸山の山號も依つて の御歌「山高き谷の朝霧海に似て の刺霧を眺めんか、恰も海を見るが如く大師 鎖を攀ぢ、更に二十一の階梯を昇つて、眼下 莊巖が林立して居る、白山權現を祀る巖峰 仙人窟、 迫割禪定等々々數知れぬ巨 松吹く属

此處より三里の山路を辿つて、海岸山岩屋寺 重ねくて久万郷菅生山大寶寺へ参拜、

この岩屋寺たるや全く窟と云ふべく

遍

笠. Ŧi. -1-餘 H

0

旒

枕

更に

く形状豪壯なる巨巖は恐らく求めようとして こう書いて來ると聊か御國自慢に隨する樣で も求め得られないので有る。 有るが、四國何れの地へ行つても此れ程數多 更に河を隔て、七種の靈鳥棲む七鳥の眺望

共安如たる能はざるの危険、實に岩屋寺とは 安住の地かも知れないが、憂ふれば一刻たり

よく名付けたるものかと感心させられる。

根より遙かに突出してる有様、そのくの字型

即ち仰げば巨巖の突端はくの字型を成して屋 後半分の屋根となれるは冠さる様な大巨巖、 方丈の如き前半分屋根を存するのみにじて、

の窪みの處に寺が建つて居る狀態、信ずれば

岩屋山お國自 慢 0 無 . E. 巖

互巖壯巖に目を丸くした吾等は更に足を伸ば

紅

と決め 暾光 折れて

料 平 北

階 下佛蘭西式 フルーツパーラー 電話南一一八六番

光

暾

紅

橋筋を

角筋堂御西停電橋戎電市

成 裝 九

卓 四十五錢

感じ好く 何時でも 打 7 3

麻 俱 東 亞 二五五六北電 通大前驟阪大 挨拶に重荷下

た 氣 7

撼

謝

南

×

川柳雜誌社指定

ようやつた御苦勢だったと友の聲

そこへ更に素泉氏や其他の人々が喜び顔で迎

へて下さる。

淵奔流の肚一遊の價値充分なれ共、折柄の小 の清流に其源を發し溪谷數里奇岩怪石の妙深 まつた。岩屋寺から約四里伊豫の秀峰石鎚山 で有るが、日程の都合上惜しくも見落してし して面河川の溪谷美を探る事としたかつたの 雨に斷念したる口惜しさ。

探勝を疲れた遍路あきら 33 ä

遙かに見ゆる懐しの松山城 スに入るべく、久万の三坂の山頂に立つた、 岩屋寺參拜を終つた吾等は漸く最終のコー

正に昭和十年四月三十日、正午を過ぎる三十 だなと思ふと淋しい様な相矛盾した考に滿ち て呼びかけてくれる柳友五健氏 分遍路橋南の上手にオーイと手を高く差上げ くなる、此處が私としての結願所である。時 ふと嬉しい様な、又今日限り遍路笠をぬぐん くて歩むとも無く歩む内何時しか石手寺近 句を残して下山、愈松山に歸つたのだと思 松山の 城 が 迎 へる 逦 路 笠

し併せて今後の御指導を御風交を祈り筆を擱 田、松山の柳友皆様へ御歡待の御厚意を深謝 大師の御旨を受けて遍路の旅に立つの日あら 凡ての妄念と未練をかなぐりすてし身、 折しも强風一陣 が遂に意を決し、 く事と致します。 んもそれ迄は、川柳界にのみ猛進々な 茲に謹んで今治、西條、 南 妄念を去れよと强い 遍路笠ぬいで 無 無 大 大 fili 師 未 練 遍 逦 風 0 高知、字和島、 H 昭 が 温 金 金 吹 路 175 岡川 剛

吉

再び

七寶徽章 各 力 種 旗

章徽旗藤 加 角辻ノ西目丁六町本上阪大

の際を聞きつく一同打連れて石手寺 凱旋の 石手寺 ともすれば涙のまじ 結願の讀經に聲がか ちとやせて居るぞと友の案じく ~ 感謝 氣 持 L -水 外 3 す す 3 御 北 遍 納 眞 7 路 30 札 言 笠 來

五十有四日色々と世話に成つた遍路笠をぬ

今更に名残惜しい氣もする 쑢

ぐんだと思ふと、

黄 華 王 藥傳家

胃肋 ぜんそく リヨウマ È 治効能(軟膏) 三日分一、四〇 七日分二、八〇 價 痛膓膜

> 賣 發 元

蒲 行 上 雷 九六五町野鴫區旭市阪大



關 選

いつもマスクをかける癖 売双線四正章船愁 さ 圓花 五 子亭水磨柳泉留果だ城鳥 圓花白 津监林 衛生家 家近くなつてマスクをかせて去にもう一度聞き直すのにマスクとす マスク外して仁丹を 噛む 女親切にマスクはづして言ふてくれ マ道母外 言かつのの片手マ 日具屋をマルの背で風 スクし スク同 5 7 つも 士寒い た女は逢 ス 工寒い街路の っをつけただ のをつけただ でスクの姿 クになつ スクをむしりの ひに だな海 マスクの 漁つて居 外の ごしょ な 2 b 世青宵曉德觀 一水葉柳蘇い

兒明童三月風容光夢堂助庫魚雨

7 7

事があ

ス

7 取

時にマ

スク

は邪 では出

魔 ひに

スクをはめ スクをとれ 2

クかけて重々しい手 衛 豪のマスク感冒流行り さ う

3 クヘ

7 スクの

のまんま物を言い

かへ夜のか

0

7

續

111 柳 家 戸 籍 調

外の趣味(10)配偶者子供の有無(11)先(7)好きな句(8)自信の句(9)川 (4)出 生地(5)现住所 及別 日信の句(9)川柳以所(6)職業又は勤務 號 生 年月

H

なもの(12)川柳に手を染めた年月

三三、(6)大阪鐵道局經理課調查掛、 まだくなかくありません、(9)ハイキ 水につかり恩讐なかりける(山雨樓)、 俺に似よ俺に似るなと子を思ひ(路郎)、 郡英保村、(5)神戸市林田區和田宮通じノ 治四十三年一月十三日、(4)、 ング、讀書、植木、 (1)濱田太郎、(2) (12)昭和九年二月 (10) 妻あり子なし、 Ш 玉翠、 岡山縣和氣 米 3 8 7 明

0

住吉區西長居町一七八(6)大阪鐵道局(7) 八月廿四日、(4)大阪內本町、 一)正本佳雄、 (2)水客、 IE. 3 木 (5)大阪市 明治四十年 水

を煮る

葉美さ桂桁文 代わ 魚路だ林雨庫

間の

今世い堯章木徳水花春禿愁四正双凡丹水船範

音助子泉履三客鳥巢山果麿樹亭愚城煙留一

とない

むで醉

Fi.

マの婦 つてるかうにも見える ス 0 7 クして スク ス 7 日少 はやはりよ t V 母同 7 スクたり を持 似 合 ち顔 Ch や同今禿 ा । 同同 もうかり・ 切 ラ ン符 愛 0 いちかなに ス を 7 7 、スクがけて出るないの整合を表るない

んるなり

美シい

奈子 子む

尼 助

内手内内内内内巡内内内 手內 (地) 子內損手內に職へののにへとののを 內職 職の 愚痴多き人とはなま子内職のあるとは言はず為替 組 むの金とは言はず為替 組 むの金とは言はず為替 組 むの金とは言はず為替 組 むの金とは言はびの百 ケ 日内職がそのま、續く未亡人内職の妻の遠慮のない欠仲人職の妻の遠慮のない欠仲人職の妻の遠慮のない欠仲として来た内職を笑はなる。 と実加をいるうこれ 横病子こ 横病 娘も 泣に きも きりに 出 食 手 しへ 82 そ灯 する欠 れが む料い來職伸 桂梢文さ梢美里宵美騰 わ 津 奈 林雨庫だ雨女夢明子童 菊一 世親い葉 童音

力 を光

路風

人那そば

られ 田 分として好きな 9 た(8) 明坊氏に手をひかれて 口 か び 旅行、 L. る、赤蜻蛉やつばりこ」の 6 一醉つばらい まだく自 (夕鐘) 登山、 (静 太二十八看 ひます U 句、 1 12 全快 お父ち 信など持てません 昭 畔柳 の走つ 頭 やんの (10)なし、(11) 和 に浮びまし 護婦長になり 社 八 年七月、 に額出 土になる、 みせて 手 古

本のもの 加 (5)大阪 道門系の 明治二十七年十 番 î 妻と養女と三 4)大阪 陵巡 元 人と思ふて腹をたて(故劍花坊)、凡聖 y ました、)新見辻平、 且 サ 111 回、 0) 1 拜 的市浪速 雜 ジ術、 經 となり(水府)、 心知る(路 古聖 律論其 西 洋 人暮 lat. 2 堅 營業所は現住所、(7)人を 句 カ 166 九 月 十一 他純 の御書 元町 郎 郎)、コスモスも遂に 同 れ 世間 衛門町濱 四 H 日(へそのをに依る) 12 本趣 (8)未だし、(9) 音叉は 年 丁目二三五、6 見)賭博及び Jil 柳 昭 味 世 百〇七番地、 雜誌 天皷、 佛教特に 和 間 切、 九 同 社 類似 (3) ti. H



部

+

Ŧi.

鏠

全國 かる様にしたい。 111 柳界の 投足をこの こと、 皆樣 展望 各 の御通 地 ですぐわ III 柳 信 家 0

品川 本鄉切 倘 偵」を發表して好評、 二月號に讀 上三太郎氏(本社客員)はキングナ 小作協定の為めに滞在さる。 【東京】▲大谷五花村氏(本社客員) 十一月二十 るき家庭談話會にて「川柳に就 神居, を語るを執筆。 を講演されて好評であった、 通し 下に が號に 月一 翁邸に開催するも 切もの傑作 「友情の 高須啞 八八日 [1] 川 より 三味、 仰連句 ▲岩本梓 傘」に吉川 講談俱樂部 白 「美しき探 河一歸省 熊澤車 0 食を 石翁 加 のは 英 メ切り 條町 「きやり」初步添削 自 金一 新聞新年懸賞川柳募集は題 に粹な小 にほめられること請 0 4 糾合し、 杜若氏、 に與を添へる。 六日夜、 曲 子供」一人三 等三 十二月 八五 創刊 每月一 東京生 + 集を催す、 地 號 の選者宛。 间、 十五日、 は故劍花坊氏 元の紅裙連 東京市 句 [11] れで左黨の面々を 川上三太郎氏選 ▲山川花戀坊氏 欄擔當。 神田明神下華仙 用紙 第 合。 平王子區 _ 川 ハガキ賞 も参加大 ▲八十鳥 ▲報知 の門 は十一 「新年

山

田菊太郎の面々、

東魚先生

の手により

編まれ十一月二日發刊

▲關本雅幽君(本社同人)は大阪

ili

洋書

展覽

會 H

に出

H

3

礼 け

7 3

17

H

川柳と Ŀ

+

F

問さる。 古屋を經て 會と題詠の事を執筆されてゐる。 三味氏が「一つの 今川 が、近く 六ノ九〇。 ▲竹田花川洞君 柳いろは」十一 雅印 來阪、 册に纏めて出版すると ▲川柳 集」を連載して (東京 問題 生田翠夢居を訪 きやり 月號に高須啞 こと題して句 は静岡、 吟社 . 0 る では 名

社總 こと、 郎主幹 二十三 古古 三十 用 月號發表川柳募集は本社の麻生路 私 談俱樂部懸賞部 泉泉へ一 【大阪】麻生路郎氏(本社主 のよい 子園を引拂ひキング 紙は官製ハガキにて一 の古本屋時代」を執筆、 本と古 H 務 III の選で課題「火鉢」「大臣 日は週末黒潮列車で湯崎 假寓に移られて健康快復 柳と朱書、 は明治神宮卓球競技の大 宛名は東京小石川音 泊さる。 本屋」十、 ▲山 ▲講談俱樂部二 メ切は十 一本雨 の傍の陽當り 十一月號に「 迷君 枚 + 幹 は 33 何 一月 金 714 識 0 ット より

東京市杉並 區 阿 佐 谷 綠雨 人)は夫人同伴で十一月 る朗さし 君と同行さる「香落から赤目 リ養老の瀧、 谷汲寺参拜、 懇談さ 山 田雨樓、 役員として汀 君 (本社 れ十一月三日 三太郎、 ▲庄 同 八日に湯 人)は 萬よし 啞三 H 君と F 百香落溪 歸 の山 共に 阪 君 味 月 六日 0) (本 六六日 ▲橋 東 へ鶴 社 氏

孔 宮御 月二 賜る光榮に浴さる。 を拜命して、 位汀 艸樂君(本 ら卓球ラケット、 子四名、 大會に好成績を舉げ 月號に花の文學「菊」を執筆。 晴れに洛北高雄へ紅葉狩の 伯 本邸に伺候、 柳君(本社編輯長)は明 (本社客員)は十 日午後一時、 間 女子八名を引率して、 社 朝 同人)は婦女世界十 大宮妃 | 會館 御菓子 御前試合の に於 一月 ▲大西 紀尾井町 殿 た卓球選手男 下御手 ---の拜領を 温泉よ 長三 治 一代見 づ 西 の秋 t ボ 判 H

は

脇

炎手

術

0

為

大病院

都

市 庵 は

Ŀ

京 變 都

區 更。 īli

小山

下內

河

原

III

柳

わ

か 町

柳

は

L

鳥

發

行さ

▲川

柳

京

50

京

中

新

道通り

階 盲

Ŧi.

+

=

號室

入院され め阪

た

村良

之前

君

力同

何

より

創

刊、

+

絕えず。 院退院後歸 げら 十月 奈良 呂君 七時 心支部 を、 たが 支部 中 同 日午 + ▲辻遊 れ 旬 見 は (本社 長女を學 茶 社 幹 六月 -6 遊ばる。 + より 111: 0 畑 + 日字 後三 間 兒 は大阪 . PU 活 市市 事 0 が開 粁 同 人)は 御 鄉 北 0 昭 H 香君 風 躍を 程 頃 HI 人)は 治吟 病氣 池 時 和 石 君 邪 快癒され に眠 H より合妹 場沒食子君 げ を 森靜 君 橋 歸 期 出 ▲西 + 何梅 2 一本 市 6 + 雕 行 (本社 支部 幽 療 年 東成 庭 + L れ 0 れ 田 祉 ※養中 太元 三人旅をさ 3 華 T 月 て字 經 たっ いわを君 支部)同 同 0 れ 月 燭 あられ 月 痛 たの 區 + が病気で 旅 同 人)は十一 夢 る哀悼 0 7) 本社 で病 4: ▲青· 0 二十 = 治 人)は 心 金本 處去る 裡 典を舉 で、 土野ケ H 根 0 地 人は 山 強ケ 社 臥 るの 19 木史 里 午前 一青 れ 6 今 + 病 3 あ 同 Jr. 本 H 中 昭 日その す 3 3 高 は 園 畔 東 A 央三 君

光 海島書 てる スで 心 永先 演集」 なり 旬 柳 區 會を 社 味 小 3 は 線草 芽 房 は 橋 夢 を編纂四 より 月 + 催 + 西 x 裡。 さる。 切 號川 君 主 0 近く出 H 幹 mj. + 一昭 1 柳一車 一六版 大阪 和 は 月十日宛名大阪 4 JII 版 H 本 掌 さる 天王 柳 = 川 森 社 」を 大鐵 社 ń 柳 雞 ス 1頁東京 。募集 同 久良 牛子氏 一寺動 = 支部 人 .7. 伎 物

命は 樂部社 家人國 っるとの こるの 一越川 角嵐 V れ 婦 " 7 + 女 第 柳 1 A を る 君 記 111 退社。 月 たが、 は大阪 會 昭 界 輯を + 京都 より 句 和 + ЛÍ 壶 JII Ŀ H 出 發 柳 柳 H JII 0 -老 號に 刊、 天 社 夜 般 柳 卷を執筆の 理容新報 例會 たっ 主 出 同 俱 休 會、 閣 席 社 樂部を主 (女流川柳 ▲北 者 -K 月二十 は に早 は 於 川 111 大阪 て催 柳 柳 ▲大 13 1: 但 1 旬 率 ちと改 蝠 所 より

Щ 無 は堺市 哀悼す。 六君宛っ 新聞に柳壇が 阪共濟會で 會 ▲古小 E は 轉 大阪 は 寺 經 發 居。 區 過 路義 島 翁 本誓文排を 府 良 橋 ▲沿 4 -4 好 町二 辻 佐 催 雄 平 0 新設 にされ 10年川 4 君 町 山。 田 木 T は 六 梢 郡 柳社 一〇六三今井紫 3 たっ 输 + Ti. H 意 189 ノ丸 れ ね 鈴 岐 君 月 ▲南 た T 0 風 部 は 君 九 + -E 莊 大 村 はや、 投 海 H H 阪 月 へ轉 字 句所 H 夜 逝 क्त 御 例 厨

叢書の 造詣 【京都】▲類 豫約 著作を公 江戶文學、 小 本とし 0 册 深 _ 子 刊、 册とし 1. は 原退藏 て刊 氏 特に俳諧文學 一は今 京 東 京大日 行 て「俳諧名作集」の 都川柳聯盟 度評釋 氏 さる。 (本社 本雄辯會 加 江戶 0 賛 研 0 柳忌 助 文學 究に 手 員 0

大 阪 TE. 郎 君 當。 月 0 編 第 輯 號 を 出 黄 3 朗 君 が M 引 柳

續

E

12

電

六年

勤

續

30

てわた 井

わを、

鉤

糸を垂

礼

て字

治

月 に十

F:

辭 間

平 礼

春

に今は亡さ らすと大佛 を執筆 柳大會 柳社主 された最後 勘並に文を執筆o 六日西 庫 社
将
員
) 生の 兵 一大に催 理 新聞 庫」 髮業組 意氣高 誌上 村明 は 催 てゐる、 45 + 0 は き石森静 本 の會 に新 合 の文となっ 礼 み 高 10 珠 月 なと 知 居 催 土佐 に遊 は 六日夜協和會館 10 -さる + 太君 ▲一視 0 食滿 て小 支部 ▲ふあう れが 祭協賛秋季 ばれ H たっ 月 が「巡禮 南 記 集 は 野」第九 生: と題 北氏 を開 てタ -1-+ す ▲ふあ 前 一般表 ź 刊 H L き更 Ш 111 大 +

號

高辻上る 六三今 投吟 京 蝠 て旺 甲 北部 [青森] 4小 下本迎 く吟社) 曲 H んで 保 たまは 0 裾 養院 あ 0 臺覽卓球 は、 より る光榮に浴 林 不浪 は 秋父宫 每 發 號 行 人氏 、試合 Ш 3 柳 礼 殿 3 î 欄を設 れ F 0 T る たの 指 柳 揮 同 3 妃 ち

筆

は

+

末に箱

根、

鏃

倉、 岡

江

記 席 江 記 近

4

111

柳

海

0 月

秋色を探らるの

が

執筆

號

よ

石川 支局北 三句以內、 一月十 JII 題「新年雜吟」「福讀込 柳 國 H 4 北國 日報新 は 宛名金 用 本社 紙中折 日報新年文藝懸 年文藝係宛。 容員 澤市殿町新愛 安川 半 紙、 久流美氏 シみ上一 ×切 賞募 知 +

遠くは

南

ま

vo

は 1)

十一月二

+ 3 俱

Ŧi.

句

命を 柳風

催さる 四日社 も餘

代

JII H

柳 創

家 立. 小川 出

雅

ED

帳

第

號

を 川 1

揭

げ

る

樂部

が

現

0

H

社参拜 成 100 心泉人 で鐵州 ため 刊號は十 取」▲富 は柳 發行、 ▲米江 君 活 0 歸途 君 等 跗 JII 川 10 3 毎 そ 1: 柳 柳風呂創刊號を十 野鞍馬氏(東京 11 より「川 礼 月 11: 0) + 芽生 他の 1 3 發行して 介 月二 大 君 しは第 に競 柳人と會 ▲入澤笑鬼山 柳 (松江 + みなか fi. 行 地 方柳界 支部 號を十 H ①は大 準備 は B みし 取 F 智山 豫 H 秋田」▲現

六

H

發

行

益

六

Æ

んなる飛

深躍を見

號

が 柳

ili 14

H

0

H

町芝田

靈

子

JII

と松

祭號として第

男れる一川

柳風呂」も

第

號

を

方より

發 松

行 山

さる。

路郎盃保持

者

本

社

句

會

爺

よっ 総録を作 念川 柳 松 者 市 H 雜 江 四 公會堂に於 發 能社 て川 柳大倉は 支部系統各川 + 行 1) Ŧi. 0 得て大 名と 电。 松江 柳 俱 支部 樂部 7 + 盛 ふ地 開 松 帰催さ 月 況裡に終 T 事 開 柳會の有 方柳 支部 務所 設 H 0 れ の看 たが出 夜に松 議 界 Ti. 志者 るの 起 0 新 る 板 社

【愛媛】 崎柳 每夜俳 秋田 愛媛 K 放送了 國 项 を調 石君 を 語研究會席上 川 腔 人に放送指揮練習 ▲前 縣立周桑 柳 (本社 寫 演 松山」で 會 册子 H 3 れ、 fi. より [17] 高女 健 人)は十一月 黑 氏 近 L そ 0 心幕梦 (本社 一く發 -T 0 JII 催され 發 研 柳七 中。 行。 行さ 謀 究 客 とな 發 員)は 表 柳多 た東 + th 4 た

周 年 日午後 【高知】▲竹內 大會は帆 大に催さる▲土 本店で親 高知 で開 大衣部主 び三宮比 催、 時高知 傘川 睦 命を 同 夜六時 柳社 催 機 催 क्त B 見 讃線全通 で十月二 さるとっ 常屋 詩 女 主 一催で十 より 君 3 町 N 歡 は 神宮光彩 記 + 迎 一个本 二月 念川柳 得 一日盛 會 月 は 祉 樓 本 同

「朝 投句 長皷」 十句以 催されるとの 【滿洲】▲風 路郎主幹 してゐる。 十二月 三日 岐阜】▲川柳「こが 月號より鈴木まこと君 1/1 [4] 鮮」▲「專賣の朝 柳塔 は仁 ▲全鮮 H 内 新年 内、 末日 夜、 如 Щ 空 川局前長田方 0 選で三 メ切り 境吟社 柳吟社 ス 141 特別募集「兄弟」三句 選 川柳大倉は十 君 4 者 海 金統 下 棩 IF. 1 1.0 光、 木柳 南門外日 主 記の課題 70 ねしの 浦 鲜 1 催 しの しは 長皷 五客呈賞、 建 湯 0 一寺氏 編 11 開 恍二と改 豆腐各題 柳 が擔當。 月 で募集 輯 啦 7 投 例 本 は 館 合か 旬 九 _ + は

ŋ 保 題 3 何 天 時 路 れ た第 郎 33 L 帥 か 桂 ti. 選 器 [11] 天 は 7 位 個 賞 性 0 月 路 0 題 郎 ムに減 盃 墨 を

秀氏 Ł 「取 いる虫 た 0 0 消 で 何 は暗 取 か 2 消 前 合 仲 號 す。 句 が hi. なを 0 -1-あ -1: る 1) 頁 事 か 0 を發 け ts 2

小增山 玉位不獨一式華真郎

主社會

刊月 幹長長 卓球 タイ 4

る 卓 球専門研究雑誌で、 ま 球 かすっ 及 更に海外に於ける同人 イムス が毎號滿載さ 卓球研究家 本卓球界唯 しは大正 に支局を 全國 + 0 必 0

見木量上数し まのす方

阪 Th 天王寺 球タイ 温 Ŀ 沙 町 ス社 T H

大

0

びよる善きもの

秋の蚊

の襲撃に

ちくち



白 H 夢

水

H I: どならとも れてきたの てくる がらともなれ ゆりおこしてゐると、はらだ」しくもなつ はなら ばそらでもなさそらだね、 3 0 が、 みにし かなと 111 かくも がはつきり あ 柳眼は僕をみ 股に爪たて」も ま びれ ひ 佛 K 必 0 ほ 1 とわ かい ひに僕 か ほ 0 となっ めて んがしる かつてくる、 みるが \$ ね あるの 睡 魔に むたい 0 靴の かとお ち 2 これ せら きみ 0 82

> ち くり 川柳 のかくてしる、 24 光の 瞳 劍 かす くろーずあつ (拳 の風 みぬっ おこる) たの L 3: や僕をみつめるきみ 死の夢がとぶっ 夢と川柳といの

たましいは白きまぼろしとも なれ 3

音樂·映畵 ・柳 利 波

提琴界 道とも云ふべき技巧の妙、 1 0 樂 の第 カ . 12 , メンファ 1 人者の獨奏レ 12 = " ツの ンタジイを聴くの カプ 1 後者の强調された IJ F スとデ 前 何れ 者の正 ンバ 1) 4

ス

るかも 職す前者の演技には る技 知 7 \$L 82 7 于 が、 -1 7 餘 には 頭 韻嫋々たる旋律の深さを の下 後者の技巧を推 るの を覺える。 質す

廿美な雰圍氣を持つた映画であったo 友情を描 過ぎる近代人に た或ひは戦慄、 映 高 。 餘 いた映画が IJ 野生の鹿とライ 怪奇の刺激を映畵にさ 46 人間の愛慾争 シー 1 ウ 7 「闘を主 オンの はこよ 題に 勔 物の 水が

たい 互びの 物はお 00 つくライオン等とカ の生 あ 篇の詩であつ 幼 300 最後に無慈悲なる獵師の 仇敵同 美し 人前に成長して野放しにされ 時やさしき飼主 互ひに昔の事を忘 活 危地を助合ふといふ單純なるス この映画の好さは原作、 とその子に對する愛情、 4. 天然國立公園をバック 1. あ るライ メラ の手に育てられ の美しさを賞す れず、 オンと 迫害の 決して 應 ic るが 鹿にじゃ 監督 Ė 手 た生 3 1. か 爭 がい 演 より 者 IJ 6 は 礼作 0 も 1 な 動 れ

から 昭和川 なつて ある堀口 同氏の柳論、 滤 柳界に乗り 柳誌も . 番 塊人氏には面 傘を脱退した人々に + 一月 出して 號 識 から愈く 來た、 更に句 \$ あ る 本格的 同 の上に於いて t 誌 の主筆で 一傘時代 柳誌と 生 オレ

を脱退する時、 3 であらうがそれはその柳派の包含力の範圍の と稱する人達からは好く云はれないのは事實 感覺をも句の上に有する人であるから同誌の 刺さを其處に發見したいものである。 いのは看過し得ぬ、 が雜吟にも同人の創作にも番傘調の極めて濃 るの。同誌は番傘の亞流を汲む傾向かも知れぬ 寂寥を感じる者私以外に多々あること」信ず 外者第三者の知り得ぬ理由が介在するとして 狭さを物語る何物でも無からう、個人的な局 今後の飛躍、傾向に對して大いなる期待を抱 人氏は真實を求め、新興川柳を理解し特異な つた以上はせめて川柳ビル誌位の新鮮味と潑 好意を持ち得る人であつた。兎角或る柳派 中堅と目さるべき数氏を失つた番傘誌に 指導者側、或は川柳家の先輩 昭和川柳と稱する派を造 幸ひ塊

痴人漫語

ものをつ

たら、凡そ交通巡査を必要とせないであらう

世の中に私のやうな非常識な人間がなかつ

辻いの助

ふ自信のある表情をしてゐるo 盤り場を歩く若い女性は一様に美人だとい

×

オールドミスがをつたといふやうなものだ。 世相とは ――少女歌劇團に當年二十五歳の 世相とは ――

私の生活ご川柳

吉田木患子

一句創れたからといつて母を呼び、雑誌が 本たからとて母と語り、何句抜けたからと申 なのです。

吳れる母です。

ません。それで何時しか父が歸つた事が知れた居ても歸ると直で枕許へ來てそう言ひ乍ちまつとでも布團を直して吳れぬ事はありちょつとでも布團を直して吳れな事はありちょっとでも「」という。

私はこんな不幸者なのです。

るとわざと布圏をづらして置き父に直して貰

×

である以上不健康な不具的川柳であります。生活の中から生れる私の川柳はやはり私の句

記念の記

廣江天痴人

こんな事は支部幹事の柳人君が書くべきだと思ふが僣越年ら私にも一筆書かして貰ひます。

て伯耆支部の美笑君、簸川支部の朴泉君、淞昭和十年十一月三日夜、松江市公會堂に於

川柳のたね(共三)

かうつ

た為、交通巡査に叱られた。

青

木史

呂

「常識でゴーストツブ位知つてろ!」

かるなど、は思へないが何時も素直に聽いて 文盲の今年六十歳の老ひたる母に川柳がわ

番

の大鳥君、

潮

それ 名の 志君、 全域 ら正 され 情あるとは言へ誠に残念な事ではあったが 印象せしめたと言へる。柳人君をはじめ十数 したのは「今までに」無い意義を鳥根柳壇 家が一堂に親しく會し朗かな川柳王國を建設 葉女君を加 庄 畔 川 たの の川柳雜誌マンに今日の歌喜をお傳へし は新なるチャンスを期待すること、して に十餘年、 支部同人の苦心努力の甲斐が歴然と印象 本社の路郎師の顔が見えなか 君、 柳倉の蛟河 3 た。 なかみ川柳會の梟人君、 松陽柳壇の二本松君等に へて五 私が川柳の倉に出席し始めてか 八束の白浪川柳倉の正治 記錄的今日の成果を舉げ 君、 十餘の L やちほ オール島根 こ川 つたの Щ 柳會 紅 の川 柳風呂 點 の比 君、 は たの 柳作 0 亦 玉 B

か についてゐると自浪會の は素晴らしいぞと思ひ乍ら高席を汚して位置 が大會堂の天井からはねか がふさがつてをり大倉委員等の落付かぬ て出 に微笑を送る。各支部代表や溶番代表の祝 を投げに來てくれ、 私 が 發 折 柄の誓文排 した時はすでに會場の大部分の椅子 ひの人出を温す 簸川の朴泉君がにこ 正治君が久し振 へつてゐた。 細雨を胃 これ 0 靴 40 挨

歌び

0

瞳

滿開

の菊がふれ

先生、 寄贈がどんなに支部同 餘波を認めた次第です。 喜ばしたかは書くまでも 第一 40 ら湯の村誌の寄贈あり 緊張振りであった。 表、 並に支部質の贈呈、 に同高點者巷二君へ支部 MIL! で忙しい 0 君 辭、 代表にされたしどろもどろ ちにペンを取つて歡喜 時半頃まで息もつがせ 電披露、 微びを述べる。 が代讃、 歸宅が四日午前 寄書等午後六時から 號の贈呈式、 あ 翠夢氏等からの景品 ん馬氏 綠之助 記念句 私も八東支部の の神 君等から 兼題 機動 辭二 の發表並 席題 長野 時 路 一本松 人を 發 演 半 郎 カン 12 發 表 盃 智

> 果く 物だ のも 調の

理と

平

野 屋

果

物

店

本 果 物 庄 111 專 5 賣 所 部

故鄉

がは蜜柑の

る

頃

たいい

親し

思ひ浮べて

觸感を樂しむ

#

き

果

物

0 味

學

冬は眞

商珠にの

L

3

る

尚當夜の路郎盃は例に 三君 バの薄寒さに 令人、よ 郎先生、世間 艶に色 來の 前 か冷えく 11 不 すでに來會する熱心な柳友 手に 雨もカ 六日 角間 心冴え、 間 美、 ライ iT 音、 冬近 八步、茶人、 5 した。 とした寂しさがたでよふ 澄み IJ ト 巨 、 信 雷 史 きを思はされ 透 晴 史 より金 柳笑、喜 時 る青 社 TE. H 散會、 光、 與三 空 温 0 30 山、 つる

人

位

0

天

33

あ

1)

り、句作

封筒も

歌都路、

彩

池、

1

席

を、

角扇,

1.

蝶

の三

タ懐先封詩筒へ

简子

才 4 石、 兒、 存秋、 波、 史、 鉞 総 現金、いた 雨 さを、 双 4 友帆, 南 BL 秋落 無草、 虫、

そこひ

礼

た庭

0

封筒へ人 封筒へ人 封筒を持っ 繪封筒男 出裏 マテナガ る 出す計 計 計 末な封筒が 1 7 筒が見料 所 1 に書せ 4 を 撰躍けるはる薄るふら りつぬ浮さ警ね相置ま 好てな氣び察ら談手れ 秋 披 史正變朔 謎 呂光人風三路泉步光樂

亂 旅鞄よごれたも 旅鞄よごれたも 旅親國真旅 旅開 道旅名湯旅 步 範宿 一範 連鞄物の 1) 1) 0) ス行 閉め 〈重每子等 の口 少を亨 中先 を 男渍 主 り旅馴 がの嵩 く待が喜 月の つのへな 3 入ば朝世 鞄の持 起 去 つ閉ぶ んつ灯れわれ 亚 辭 重 てけ削 E いを た たる にぬ 1. 3 旅旅開 寸 童 旅 旅 旅 見 る歸座旅旅こ り鞄鞄ろ鞄鞄く ぎ物鞄鞄鞄え 1) 柳節朔鮎三喜角艸茶不玉享柳變 笑子風 美碧 由鼠樂人角 虫史笑人 角上

れ創を句るあちのい



理整。樂艸·柳汀·郎路

文字正 締切 投稿先は本社 開催月 紙 は は 確明 なる 每 H 月 及 末日 瞭に 場 事務所 1 所 原稿 とす 記 記 人 載 0 0 用

こと 紙

のこと

稿 清 規

投

額艷額小額國玄 少料にの し父開 理 あし屋 たサの 題 り重っている。 釬 額 額 うい文何マに 時ヤ しに感 市 いなじへもの長 晋いの 艶と額の を額限め違を感 立の科かふ忌謝 父院し額み状 玉三巨史双彩砚 14 虫郎 雷呂魚泡笈

題 へのま し上に 地 獄 を無めぐん 繪ば通 似る 北 い姿るし美ぐ見春り れ光なか豊少り入の拔よ りな夜年ぬり風け 鮎青變九亂節享夢八柳德 美兒人波耽子史裡步笑三

起 羽寒が 初らたいを織する 羽 で英人とは、一変なり、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、一変を表して、 羽織を対したい 総とさればない というきかぬ 総なり を初継が を知識が を知識が を知れたに へは で欲頼、性時仕 もあ 江る 1 むむ出雨度シ む戸さ 知る 待なこ許初 すすヨら惱座のれ 124 0

柄もりと婚織るるンずみ敷者 德同秋同柳春青三落史琴蝶茶角 草 笑秋兒郎丁呂泉助人嵐 履氣墨園鼻こ洗墨子墨う はをかれた屋を でれた屋を でれた屋を るらをたをき

下が組死た領書 出 を ひへはも 0 あ 又筆 無出な香 1) が墨 1 と田 をけ染書秋 つ作積暮嬉 きなりししりてめき子 秋葉い八蝶艸勇落友ト 多 無 わ 0 草光を歩助樂子丁帆居

の選倫家屋の 祖のい 雏 言の額叶の額あ になる手紙をつける調をかれ こうでなる手紙をつける 鉄道になる手紙をでした。 額 金 名はある。 鉄こけ 朝 て額しのれば 貨額義 親額借 皮代なかめ交續たいま買 入ら 亡曆 目 1) けき字きち氣れひ りれ 正柳角亂三蝶友艸變享秋亂鐵同角 0 光笑嵐耽碧助帆樂人史草耽心 뇂

軸同同同住旅旅出旅

旅鞭や今更の 旅教を表すった。 旅教を表すった。 旅教を表すった。 旅教を表する。 旅教を表する。 のでは、 ので

きつ育す出い

へかな族張る族

やりれり鞄員る鞄り

存汀史い八史節都い

别

府ゆほし

手かと目

座屋た下軽をはに

車い悔重行

命

を歩呂子人を

墨光 墨華讀署將墨墨眉級 吉色 計るを中め名軍計を墨馬日 が墨すのぬすのにすをの 羽けのひ羽 題 織の羽織の羽織の ちゃく 墨り墨杯の酸の先故直ぐ 会生料い と悲生郷に 主織織を背 L こに落と なっ ぐ、墨墨 1 も占むま へたゆた肚のの のかる ス った吉 のか慌墨る揮認頼父つる到 毫めりにて 3 鳩と 1 を ガ進なた買すぶたな會るの問 らの出び拔 9 ひり 1 1 しふる役所 れ糞るしけ 郎 ラ茶三亂琴柳三世蝶史 八同同鮎同 1 四間の

人碧耽泉笑郎音助吕

美

-55-

(人)人 (地)器 つ色事ら書く 滴多に 、まで 1 の日は 自は 4 奥思 向個迷触樣 性 育の 0 14 た 墨 をす 定親を習ぎ 心る ひる 路桂ラ都正不 阪 1 命 郎三十 人光角

御川 旅柳 於雜誌社 清 美 追 句 入

月 Ŧi. 静思故 H かひき な出同 清に、人の 君來た の會め 遺三に、 こ御の翠 の遺 - 夢 夕報坊 夜 族 を 0

堂たを殊かとりない。 話 なった。した。 し君 事法汀いの を深を深め、思いので、というでは、これのでは、こ 感 まわ一山 して、 入放人 故子 る 人氏 御ののの 代思御選び挨 1/2 忙 3 は出拶をは 中 で を を は あ御故あ肺

育伸した猫に夜 も貨収猫 キへ 物間をごの 憂と出やの氣 のを 同され頻迫 てにる 文 た來ふな 緑学り 75 なしり 文蝶同正春洋滿史 光光 々 潮 呂

澄合さな 男常な を氣にいるぎだにい

しび淋 EL

通夜の問

夜れに

がや御

白ま燈

みず明

努與丘

和 和 前 郎 子

猫背年子臨爪ベ銀

(軸) 曇然 故人と 告告告うのと
別別別の
徳は 雨のののよ 告花あ辭告の思 別のつへ別中 れ秋見たに別眞 ての く閃む式淚 去なり光せのぐ ぬかぬ器び列み 鮎文紀蝶同紫 0 美蝶太助 石虫

誓閭屋 地文ん と妓 と母る ある 鄉へ 待道啜 つて話聞 小がさあをりののれ 子第無かし ご嗄れぐ撰泣電なたぎ ま合て き話り 膨れるみり 1 b 正同春文蝶史同み同百玉滿 蝶勇紀 0 0 0 光 光蝶助呂 る 羽虫潮助 太茶

ビ幸ビビ母ビ放新も ファテに ででない。世帯でなってない。 友キャビキ旅テーによったという。 フへへキにキ 美 君 は E いの氣野燒踊 テキ 最 4 堅後 味蠻 4 1 日な 1 悪じ匂出 ひぬ日 1) 1 みひる 同玉同鮎史同與洋多源 0 郎々郎坊る

置燈ああ燈御貸燈お もが明 おみ何母 るぼし云猫 ゆらいて 1.3 してび青事夜様影 てかがのに ありあ佛見出 て明り灯れり る 世 日へひる り間え來 正與同文多正錢邦同蝶多紫鮎史葉洋正 0 光郎 助郎石美呂平々光 蝶郎光茶典

同同佳 E 阪 おたよりれ 静作知 7 7 7 大 人もなる だ歸らむい テ 阪電初役代 テテテ かに 111 + +++ マを嫌ひでと 一枚宛の勝 の强を病ぬ る代家なを 柳 テ と社 と表業だ役の表でいる 椅子 でには代表 會 丰 少にるる 例 ま し空術母如だ噌忘役 ひはをが才てをれに とほり 室術母如だ噌忘役つ突展騒伸 切 ス批 切 200 び て立つぎ チ 1 工評 大 な晴知あならつてなるててや上れた つて 1 女 1 給ヒす 阪 山形ム れり りしれけるりる 鳥 U 17 3 郎利 柳淺千青淺左淺正同芳同同路聚君同 たけ 4: 文鮎多雨同正蝶 選 0 秀女秋郎女柳女前 生. を 光助 女 蝶美郎舟

など

でに熱

霜霜お愛 焼焼ちす 霜霜霜燒燒燒 よん 0 の眼で見る誓べなんの戀へ をの もよれののの やば手手下 剝樂せ で年越いでなる。でも関 女買て 誓釋 背を 焼ちした 交さ とれをのをのは のれ向 霜五國隱手握豆る 安ぬけ ば錢をすもり を妻 い逃て れや賣な握しよの こ避の 行み 1) 1) 0 り情 8 同洗同方路たけ 方たけ たけ 聚柳 正生を 秀 を正を

天)代表 題 でのると 出迎 0 音がだ紙 分に 若さ 原 松拾處の他立見 松撮 4 人る不 \$ つせの 原り先 0) 4 相 松 幸がな風て 舞原 出 を 手 か首 きり 1 .6 老 高が吊なゐくのの二なな 0 0 りる所向戀月 り地し 芳路柳水千柳芳水千同聚正左方 氷 一生秀炭秋秀一炭秋 市柳正 炭

(地) 霜焼をしてさへなさ (地) 霜焼をしてさへなさ (地) 霜焼の買い また (地) 霜焼の手で おおしきせは霜焼の手で おおしきせは霜焼の手で おおしきせは霜焼の手で おおしきせい 電機の手で おおしきせい 電機の手で おんきせい 電機の手をすきやき (人) 霜焼の手をすきやさせい 電機の手をすきやさせい 電機の手をする (地) 霜焼をしてさへなさ 大阪も知ら大阪は戦大阪のネオ大阪は戦ののネオ 先づ馬 佳 誘 も知らず江戸つ 誘 席 飨 月雜川 感感をし き射ん 題 題 廿 誌 へ着く を 六社柳 誘 H とで接 た責任は 7 市 て後のでは、 とおい 出 兒 例 れ鮓なくぬ 80 お選った拭い 死る きる水 會 友き子ふ 酌は 仲ん学湯 氣納朝は で生 枕をて 於 てを霜つい でな 天 氣出さ燒て炬れのなま 負さ愛る 士のなゆ活 での 春 阪 本 ははひ で鉄雲 るれしる燵る顔しち ---光 光 郎 存與案並 與豆春豆節案並 路路千葉同同同利同同千同湧 三山 14 居 郎秋光秋子子木 光郎子木 郎生秋 4: 秋

雜川 題 社柳 味 池 橋 句 阪

三爪板三三閘 味彈張味味か り線線せ のへをのな あい彈南い 彈 かけて桃割れいつものとこのものとこの 虫味 離 れ関れ れ奥 人味 70 合居が鳴 1) 1) 青夢か親鮎い ほ 見裡る

品 早 空空 吸吸を寒 花 かがとつい ールで かあななななななない。 なればで りるい 同鮎か鮎親 ほ to 圣 子 3

人ゲートルリー人がエトルリー人がエートルリー人がエートルリー人がエートルリー人がエールリー人がエールリー人がエールリー人がエールリー人がエールリー人がエールリー人がエールリー人がエールリー人がエールリー 4 くやゆ 兵 左て揃りる りょへなん 向ゐらほで きるれし來 鐵い角南琴 3 を嵐星泉

早 速 1-11 三柳 支雜 部誌 + な 111 -) ナ E. 0

鮎

豪傑の 紋所あ 村芝居 11 す へ象 世 題 豪傑笑 屋にす 傑て -L 3 豪 まぬ 於 か 神 ふ苦義 津 4 社 りなが供 東 裏 らあ ľ 互牧 1 團 獏 集 1 台

零敗 (秀)零 1 敗 題 座 ツ必悟 た後 プ 勝玉 がひい傑 の碎 1) の歌す 夜 とム肥に理子 悲る を 風壯つ 邪 なも 10 地りり いさを 3 t を心 嵐心泉

平七八熱寄熱ス熱度度の宿のコ

含あ

し見が

カ

IJ

の餌

ンツま

T 0) t

6) 3 を

3

二琴柳角鐵角北

坊泉京嵐心嵐星

る投切親つ蹇教ゆ

~五五兒

り赤分分のの

い秋振母

りん日り信

ご向直じ

媚爪見眠あ

うがへ

けををる

り番げる心

0)

美 公平に公平に 密密密 平 談談談 もす まだく 衣 に分配 題 頭けっ 桁 2 0) · C 着 を兄て損 大續物 下貴幹を 3 < げに事し な筆り る不腹つ 笑がお 新服がど ひ要ち 入あへけ 1 社りりる す琴帆 角い角牧 3 嵐を嵐人 む泉船

雜川 社柳 伯 耆句 鳥 取

度

H 伯 者 III 柳 會 事 務

喧醉子喧喧ま爺 月 ご覧 で巡査に負けるというでは不安その喧嘩巡査にする。 心である子がは 嘩嘩 査はも借 うに 良く 7 あ 立言はれ ま け同 ひ起 12 3 鏡しじ む人石

早早早早ポ

夕雜 牛

早早

速 遠

12

速

ののに

見光眼

ストの 中

永星のの

ま阿

た願ち

、陀の

きさぼ

6 ぬま

鮎青卜觀

美兒居月

IJ

0)

速速にを

居遺の間心タブ

任袂に待

れ汗たる三り

るを長贈日ら

な拭火りたれ

觀青青茂夢

月兒兒子裡居

えす

題

公

7

酒

力:

要

1

む

選

人地秀同同佳

子法螺

すいらいなから

法家男

螺のの 法耳

だれてた

弱ゆば

た吾

相螺

槌 からの

き鉢物ちる

速

聊かに義 地 天)こくろ 人 ウサ 洋 つて H 1 傘 + ンがア 力 懫 びく ぼ 匙 H の秋柄 を ってく 12 77 感 12 0 L 魅 へ魅 7 妻のの 力を を うけている 暇陽 於 力: 啮 4 い返 綠 大 杉 1) 3 原 L 之 於泉 郎 助 笑大 好朴 選 報居 朗朗 郎泉

事新女男 浪花節 日本の星が見へ しばなるだら 川柳 女淋 女中 第雜 しそう 中湯 て行かれている。 支誌 大か けん聞 部社 3 7 なれぬ風 高 7 を 1-1 松 欠き質齢呂 吟 社 びにひ かず 句 す來風なげ浴ての風 んみる中呂 33 呂 9 同美小同秀起ひ蘭鷄 ろ 峰人む鐘石

交渉員ひげの公交渉員ひげの公 天 地 喧酒 瞳が L て喧 生へたがほんなど 兩嘩 親 0) B な 罪 を 6 を きせ 引 口 をばけら それるれ がけ りる へる人 美起美蘭 鶏秀 笑人笑鐘 石峰 7 7 午 組勞東

火消 火火火共火消消滑滑 ぎ壺 月 雜川 壺壺壺壺 の阪 寸母同此轉陣 題七 の立が 虚は端 社柳 -) げ地 0 か 今治句 火 氣 つゆま 1) は とこ 猫 近ま胸 碰 \$ 明 .6 6 身 7 0 南 魔だなけ蓋躓がの中 に火火はをま冷火に 於貯蓄銀 媛 な消消なすづえ消あ 4. り壺壺れる きる壺り 行 智 枯藤同曉同宵虻 明 支 リり 選店 報 明曆風石 佛生 童

(軸) 童後の日立ちに触) 単級人科へ男としば、一部人科の異として、同) 婦人科の世話で、同) 婦人科の世話で、同) 婦人科の異り

の世話にも

デ叉生 3

ti

藤宵同心曉宵虻心

日出度 良りに

1. なら い。世母

來

人科は靴で

來た

000 來て

手

にが間が 婦人

の素

行開の

い用

みあ

ブウ

一大小のが

3

九科

府童明曆府

島

根

合と云の個者を云 前〇 プ ス ス ス ス E 七 モ £ 席 席 12 ス ス 時 乔北 がを エ防で 組合色 6 0 ふむ プロ海馬 7 花咲摘亂 = 7 ちぎてんで ス プ ぎる で乙 -E 智 拭 12 E 合 で品 八 0 ムろか ス娘軒女 姿 -でにぬ のの長の 6 便 穴氣ら 花村屋夢 守 6 をもれ 朗 淡のの甘 3 受 掘安た 容 け るしり し戀秋 L 柿 泉 共 樗好补 同好大朴大 樗 大 選 朗 柿 柿郎泉 郎朗泉朗

組

大

選

(同)孝孝行が職 (同)孝孝が職 火後奧火火消水後線 行が職 飨 をの壺 を 思 ふ を 思 ふ を の 部 題 そ網 題 火 立炊 洋朝 でとほ こら 事食 から 婦 に III 朝に 嘘ま 先使的程時 1: 心心無のえ 4 伯 枕 で生ふはに分 の算用ふけ あ金のて 並付親術 下のなたつ べけが \$ わが子 4 へ火火でま て加無知れあ澤れ云 置消消無ず 井 り山る 0 き壺壺事 藤 生 一特柳曉智文柳曉柳 同同心同曉 選 風明石童明庫石童石 府 董

助得が に際 の表達譯 がるるだ 助よけ 過役いは ぎさ日云 るん和ひ 邊 曉 柳宵一藤 童 選 石明風生"

學酒村士買長

席

題

良

多

1.

E

器服る

生明

菊とこの

りふ助

軸天地

下戸ですと云ふ言葉にも

裏があり

味

4

别

○流行歌下戸は末度

戸でありたくない末座 遊り

同柳一藤枯一

石風生佛風

心自华し 軸回同佳 同同同同 動主み 能をせさてるT 動車を三臺に 助 六 体管 題 題 17 体み土管に影が 体み土管に影が 体み土管に影が がみ土管に影が 3 0) 75. 助い 1 くの國土と対 新籍で る足ど結道で の如し 助役で果てる氣にもなりい助役出世をする氣なり を 結 す際 肚きかさ れる 1. 走 と星を大 の右を 二戀並ぶ辨 の儲えな ュ下た 締と 雨る 風 をが をけ 女 ŀ. る式 ライ 轉み吠行なふ のな知 あの當き てる ぬの 我 るれ 酒肚どり るせ箱」 子キれ 1 話 部 齡 H 柳 特 曉符一虻藤 宵柳 同同 心曉藤符 石 一柳符藤曉符藤符同曉 - 1 明 選 選 乃 童明風麿生 府童生明 風石明生童明生明 童 明石 童風府

> 雜川 高 知 句 知

か竹十

(軸)土曜日と な内月 席 曜日日にと聞い 題 句機廿 會見一 女日 0 1: わりも 神居され 宿 曜 三次ブ 直 1) 店も知つてゐてばりもなく夜學の ŧ 比ラ 呂詩ル 0 兩 醉まのだ 氏谷 どれ灯 を れ 迎 水 青同水春濁 水 本名の書けて白 新本名を無岐すなほに言って 名を無岐すなほに言って 。 名で白粉臭い荷 を ま と うは稿料に も 足 魚水水

章釣往借釣北喰竿 心糸診物れ風ひ仕 ののはのぬへや舞席 出成出 天地人 世功世 出世して歸りや大工の子と出世して歸 の 箒 を 忘 れ 手春の出世を奪ふ灯と知 い 帯 を 忘 れ 手の母校を寄 附 の 事 で 助の母校を寄 附 の 事 で 助 しの の汽笛 釣った 定 体鳴 釣動一釣 動き H うる て連ぬの ぬ古とが 暮めが畫笑 呼逢らる の觸聞れ与あのひ機 訪と り月顔見 ひず る居ひこ 23 機映比水青春稻青濁 比水映濁稻映春

图

詩魚珠水美珠水

-1-一雜川 H 八社柳 道 H 頓 ili 電 高 句 津 線 御堂

選

(軸)連れて来た子供が (軸)連れて来た子供が (本) 女客ではい 約 車 (大) 数字一人は柄を概 (大) 数字一人は柄を概 (本) 数字一人は柄を概 (本) 数字一人は柄を概 (本) 数字

眠なるしかせめ

9

水稻濁青春映春

魚美水雨水珠水

醉生らと

水雨珠美翠

めれ宿ぼ

見

女

青映稻松同機

いるば

客客り

女女か歸

柄を探束った変

題

女

秃紅筋 角 山瞰 報光

錦父出

着母世

踏髪も出丸

故世刈

の目親

のを

土しれ日

青濁稻詩

果水美

のし 席

て白て題

呂

女珠詩魚雨水美果水

鳴る音 音たて 音がしたやうに 拾 部匠と云ふ苦勞お弟子を叱るよい叔父に苦勞をさせた事を 何處となく苦勞の拔けた笑ひ 苦勢したらしい 着 ヘタン ヘタン クタン 2 7 及 及 きり のろけも プもはつきり 題 プ ブ プを静止すとめてたのまれるプもはつきり絶交状が 來る と桶 7 力 をのがれた切手はが 狂 へらく 眞 ーアのも Z の音する 付 笑つ 豊書の字 月 の女 世朝 一瞬るな 0) 3 から される いた な風 6 ななるな世能 3 0 0 1 1) 任 る 角 24 桂 春太汀變鮎 静春鮎蝶春静德 つ四 太秋美助秋太三 圭 風柳嵐る郎風 秋雄柳人美山

盡色

帳紙

(地)醉ふて來で日(天)義足音して 生 を兼 と替って、 か きれい味 趣味 生 0 夜 0) 伸 會せ から 75 こてゆ ですって去に 長 Щ 鮎静か春

寝てる子を起して芝居 歸る か歳に行く娘と拾 月 の 芝 居 製 から立ちつかったがれの芝居夜半から立ちつ

ついけ

1)

よ變世玉し間

な関

1)

= 狗

四郎

3

嵐 美人

お芝居

一一层

旦那お

越け

使土

ひ産

鲁虫

をさ

ほ

0

拂

U

0)

ぎ來な

題

岁

Ti.

歲 末 特 別 泰 仕

年 組 賀 ガ 牛 拾 + 枚組 钱

表短 阪 1/1 大丸 南 區心 南辻東入ル南 齋 橋筋 侧 1 日

阪75 一七 七五一番番

禿ょ都み世柳 し會る晋狂 山美人る晉狂 俞 人

人

ア

1

ツクのキャンを避けて横に外れ

木

ン燈靴

の尖からか

なゆりく

灯り身に

0) 7 見くびの職

かかきネオ

オン

が又一つ

大資本主義

のネオン

をクワツ

か

める

財

布

ネオンの

灯がのでき

にキオン眩ゆくけつまづき

しさの旅のネオ

ネオンを戀ふ銀座

美

敷ダンスキ

美太る秋 (佳)ネオンの灯遠くで ネオンド 傷心を抱め ネオン 生捨て × (住) 末オン((住) 末オン((住) 北螺船((住) 取しさら(住) お座敷) 上ネ 木 ス 役 才 スケットネオ 1 ネ の邊のネオンの中の ツトネ 燈雕 證 サ 6 7 オの終 皆んな狂 灯列 1 此 木 いてネ 木 木 ・ソ旦那が變の複な家と 才 才 のネオンに よ失 1 1 家見 の下で 時打 才 ンの街にゆ ンに と服 と教へられるとこで病み た色 つかく 灯に 見てる子守 ま 夜 廻る笑 た」く を き暮れて か 吸 つ月 1 人みる 星明 らの事 粧 更 はて明なまな消せ 院 n 1) 唄 ti ラ豆春與か豆角太紀史鮎桂蝶紀葉 イ 三ほ 圭 之 ト秋光郎る秋嵐雄太呂美風助太光 都み玉春靜 ラ柳春 1 會 人る虫光

選鄰當

のへは

は次我

候なは等

木なを筆

0

てか

6

居

逊

ず

排

エ空間チ製情

ラボ 夢の

止 ま

8 だ動

寒す

3

觀遊美鳴

月步生玉

おオのの

前ピた目

も黒砂護銃田漢ら

を持てでなるエ

工知

オピ

ヤれ

チ チ

オ 才

F.

to

津

ス

の像

明 ス

紛

を

び

7

E 明

ス

吹き

觀大美靜

月稳生波

文文 キリ

街反ト

は抗

ヤ的

ンは

な 7

のかかか

闇れら

剷

+ 7"

0)

虫

を 容 捨 3

取

佳

等

題

僕 雨

役

ま

のが .6

降り

湯

あ

社柳 梅 H 句 會 大 阪

) 世事) 社票

のからので素

一般なるのである。

に牛をついて牛の れ

のこ

牛選

な殺

と票

き所

票

選

優

00

目先 肥を の子 席月雜川 しの 題 て発生 H 先此 於 松 にをに生 4: 枝 お持と徒 靜 波 辭つほ皆 居 儀 7 鳴前 1) 玉 波 選報

ふるさとのバストート できれて野り た金をまわして 野り 光生 して と話 世 ば生 きる道 書等 べれ を となるゆんで 中り 父くとく 知をゐかま 白鮎靜觀遊鮎 鳴鮎翠遊白 玉美陽 菊美波月步美 佳佳佳佳名

ル十さ有零落の ル大元金 難の 落の金 う果題 金か 齒金 たはへ門 御に なけ返立 大美 津 菊绿生

な んて の御禮聲がかれ 小れ て るる 要 卜觀遊靜觀鮎 居月步波月美

)世渡 飨 0 ン金崗 題 をするが入しまする 頃 O.L 足 金ならして質 いの金金見屋 よくう 一歯とる 1 い行 6 6 卜静鮎同白 月居波美

帛

紗

も魔か足足 軸 あうすでに犬がれたくなゝ父のよ 0) 跡 足 か を を残 あか たと 交訪 2 L 12 の跡登 7 わらじ山 才 14 変を 通跡 歸 E" 一路 つが 粒む た亂のはる に有 雪れ足秋探 佛難 て跡景險 達さ 色家 よ 鮎美 觀鳴 卜翠大 津 训 美生 月玉居陽線

三時無約

軸同佳

墓詣

落ちて野道の

道をが

びかが

る歸道

// 佳

軸

陽

題 3:

時

間

天地人一時需取

日本

聴る

はの時のらを

間首ず

同鮎翠觀鳴大白

美陽月玉綠菊

枚付着

馬な間

と母

は

時

見

2

軸 月 解 說 hi. H 夜 1) て ナ × 大 坂

喫茶店 飾

美

報

坑車耳ふ電耳洞穴 道馬そ穴屋穴に を養そ穴屋穴に 秋おさと 題れつめ まごいろ 一馬禁止 のない。自然のおり 完成がものかに関のひか 心ほどけば 5 1) i 0) かい を冷 ころ の帛紗の帛紗 紗をが 亂步 帛 紗目金 1) \$ W 穴紗 正比 集 た 1) 紗 紗象中き さら 83 1 ズ へ帛 へ牙 た にれぶし羅紗 2 4 柿紗 人 のをの撥 坂れが 0) わ 生明 0 % 青つ少 ts 1 + H 道秋 な 水 さる 高紗狮 1 ナニ 3 知の日く する流 帛島かり 九 りな 兵 り穴和るるるれ 3 紗田な道 ぎ 庫 同同同德角同鮎 同同同鮎同同德同同角 三嵐 美 美 嵐

のたはけ 商店 りずる 美 同同鮎卜 報 美居

- 62 --

いらな 1. T 于 才 E + 0 字 鲇

美

姓による 年 後氏の 移して滿 る は、 最 0 ある。 わが社 念に充たされ 70 たの 柳の社會運動をモ 後の 其 偏 後を織いで半 の重 * 本號を送る事の出來た 記兄姉 本社 新 路郎主幹 成 のと今更年ら 年、 1) 任 特 0) を持 事 御 社: 名 務所を上 援助、 歲、 内 0 ち 編輯長山 より 堪 ット 御指導と 0 神容 厚 曲り 路郎主 へて本 御鞭 は サ 沙 更 2 感 雨 た 町



輯 編 0

汀

柳

意を表する。 てゐる絕大なる御努力は日 て執筆され ると信じる。 壇に永遠に残さるべき 自ら「川柳○丸帳」をも發刊され と先づ打切る事とした。 分である、 に於けるわが社 M 西島〇丸氏執筆の 柳年表」は本號を以 柳家をあつと云はせるに た筆者 新春を切に御期待を 十回 の名謀着手は全 0 深く感 永きに亘 で体業で 明 治以 同 つて 本柳 氏は 部 あ 後 允

慌

昭

和

+

年

+

暮

礼

よう

2

の御期 へる事 で來て了つたので残念であ 次は又も達文の塚越正光氏を迎 太郎氏が惜しくもお約 ▼川柳指導講座は名講 特に添 が出來たので必ずや皆様 ふ事が出來ると思 東 Phi 111 0 るが 時 J: ま

下 水 1 ルで 行 つてゐる

掉尾を飾る大句會として盛大な

橋俱樂部

開

催

本

本 社

階

るの だけ 伯に は嬉 本 柳 習 よく川 K の表紙 理 孵 温を 柳 深 味 描 が溢 いて 頂

全力を盡して來るべき丙子柳澄

業部躍進、

營業部の

擴張に

覺

飛躍を

塗

け

3

御

來會を

切

荷雑誌の

發展

相

侯 事

尚月 漫談 をお願ひして置 たっ 稿を次號に割愛させて 本號の 筆者並に讀者諸氏に御諒 Ti. 評、二十日會記)及び葉光、 紙面 の都合で當世 帅 事も 樂氏 頂 休 VY たっ 0 承 原

て吳れる事と

H

よし

江さん

したっ

は第三

豫定。

使用 别 忘年川柳大會は本社 スタンプは平常は本社 に出來上る事となつてゐるこの 郎高伯を煩して忘年川 員であり ▼川柳雜誌社スタンプは Ą 本社京阪神支部 れた最も縁故 本社 揭 して頂く事になつてゐ 載 本誌創刊號表紙 句會席上 通り の深 + 聯合會 に備 後拨 月 い柴谷宰 付 柳大會迄 事 t けて御 務所 心温を H 0 主 本 夜 下に 催 社 客

ふ會」の 講 き新銳漫畫家 thi 小 れてる JII 武 温

載し 不 通 せいん 炭車君の愛娘、 號を十一月 る御用件に應じる事 してゐるので、 なった。 が事務員 ▼社告にも發表 本社 は十二月 IK. 記兄姉 人名報 俟 勿論毎日事務所に出勤 はまな 御用命をの として來 0 上旬 御 二十日に出 「高臺より」 接 皆様 畑 した通り川柳家 に發行の 助

ので、この際新愛讀者 ▼年末は例に依つて發送カー 1: に切迫した。 頂く意味に於ても必ず 0 年賀廣告の 御申込下さる様 111 御拂込を會計部に代際新愛讀者の御勸誘 柳家名簿を完成さ 本社を後援 締切は十二月 ふ事となってゐる \$6 で願する して + F 以 世 頂 H

末筆となったが、 進を新 る皆様 御多幸十 擱

が

出

來る。 總ゆ

よりの

醋

(制はおい) 々人の係關社誌雜柳川

今里支部(大阪市)幹事市場 没食子 地橋支部(大阪市)幹事」 に 却 要 御 旅 支部(大阪市)幹事 室 岡 白 峰 総町支部(大阪市)幹事 宮 岡 白 峰 経工支部(大阪市)幹事 薫 井 英賀夫 大磯局支部(大阪市)幹事 薫 井 英賀夫 大磯局支部(大阪市)幹事 薫 カ た (受媛縣)幹事 薫 井 英賀夫 西條支部(愛媛縣)幹事 薫 カ た (受媛縣)幹事 薫 カ 九 天 一年 (受媛縣)幹事 薫 カ 九 天 一年 (会子 大坂市)幹事 植 山 九 天 一年 (会子 大阪市)幹事 村 位 勇多子 大塚 一年 (会子 大阪市) (会子

> 十市簸竹伯新光今玉 三岡川原耆 支 支 支支 部部部 (島) 愛大今大 天 大 阪 阪 鳥 取媛阪治阪 根縣縣 市 क्त 縣市市市)幹幹幹 事事事事事事 後町三木永曾清 淺平 田鴨村田 牧春大承美默里 人光朗春笑紅九明帆

淺赤額 藤藤松國長長長田嘉笠片岡大長池助 田井原本村本枝野岡崎中納原岡本道谷澤 卯 清退之 研史晴太柳辰 路直一弘一樂 一司藏助作三郎濱郎秀二純生方平雄徹居

窑

前前安窪谷田米川川龜小岡大大大鳥 伊員末田川田脇村村村上井川田西谷島山藤 弘 三長五 電流波素之ん花太晟 面三花濤一彦 太 健郎美樓文介馬菱郎修武子郎村明步造 郎

同

奥大大新西西西長原石市石岩 森小藤蛭篠柴食 野西鶴見村村 谷 崎場曾崎 人 林里子原令滿 世 い川 没根 禿八喜間明山 わ三史柳食民柳 東浪 安省春 二南 山歩由音珠月を汀風石子郎路 魚人古二兩郎北

6

首須關妹毛廣廣東日姬平平平清芝水三宮喜 **入** 藤崎本尾利原田谷野田井井井水 谷輪岡多 竹豆雅變九會六聞華夕三春蒼友四鮎夏白春 楓秋剛人波人浦路水鐘郎光太帆葉美曉峰秋

麻主 福祉 住麻増山西橋 編 庄山永高春生生 幹 田 単 田 生 位 本 田 本 局 高 本 田 橋 元 田 山 断 顔 葭 汀 雨 艸綠 人 よ 丹 十 ほ 紀 零 郎 樓 耽 乃 柳 迷 樂雨 し 路 九 る 太 夢

御

申

込

は

本

社

事

切手代

\$

可

取四東每 六京月 判每 鳥日 區發 加川高行號 柳川高行號 雜柳田一七 雜柳田 雑柳田 記さ本計 計 計 い 二五 頁 務吟ノ錢 所社一

Ŧī.

+

·枚綴

1111

金拾貳錢

(送料共) 用

さはり本

いなで社

ベ頒規

く此別し句

等を御を御

使投左

用句の

下に通

御

JII

雜

慧

投柳

句

大投賞塩田の 阪吟品と紙 麻市所 明 題 明官戦十二 化生出 粧路通 事がまる一月 路郎氏 路郎氏 北郷 新郎三 薄 謝を 聞氏三六 早 社宛 切選 す

「信仰」 川 主寺區上 柳 上 L]1] 柳 雜沙臺臺圓

誌一廿六十 社里錢錢錢

大每 阪日 一大 朝むずり大阪市 鄭稅共六十五

る

録り

句 會

誌

內

知 知らせ申上まっへ御申越されば 會案內希望 ます ば、 其の の方 都は 度左 お 記

川製並

本

上柳

一巻まで

卷

大各

天正寺学を金まり出まります。

阪

市

の自分を表のいる。

内、伽襟廣告、その他の金切手で用句)

會六阪報四市 五話 花內 係 住 街六奥 吉 區 原·野 住 吉 事二 悉 mT 所七山

南電

朝 報 柳 壇

柳吟 家 な 選 募 0 雜 歌 用 紙 位 ガ 汀 牛 柳

> 木社 本

事務員採用

社

赘

助

員

7

L

用掛春筆生先郎路

→册短。物小。額橫。軸掛

(金前) 圓拾額 • 圓拾貳入函軸 圓參 册短 圓五 物小

日五十月二十切締込申 部理代社誌雜柳川

發行所 東 向封左司 同見 小京市 7 と異 はナ初色 E タ心あ 43 子 者 けは者 る JII 區 は 絶對への ませ ~本 上 誌 錢 入門欄を に見 2 切

手

+

枚

逃

柳 研 條 町 究 八 社 五.

III 111 J: 柳 三太郎 毎 研 月一回發 究 主宰 行

一半-年年册 金金金 -- 11 圓圓錢

本 社 同 人 とし 左. 0 君 が入社 3

拾圓 旒 **瓜支部** 也 の御寄 同 人 鹏 0 を受け 故 桑 Ш 清美 石 君 崎 0 父 君 北 石 より たっ 竹 內 機 見

0

御

7 て松 一月十六日 本 營業編輯 研 氏 かい 飨 快 務 諾 3 九 畑 H 本社基金とし よ L 江

告

社

投 稿 規 定

▲投句は總て葉書又 ▲「川柳塔」への投句 ▲「近作柳椒」は全作 は同型の厚紙に各 認め、 は同人に限る。 家の雜吟を募る。 號を明記する事。 種各題必ず別紙に 住所氏名雅

募

集

第 十三卷第二號課題

帶 空 十二月五日締切 長 (各題十 句以

內

病 世

秀選 水選

第 十三卷第三號課 一月五日締切 題

昭 和十 和

+ 一月

月

11

Ŧi. 日發行

日

ED

刷

第十二

回卷

日發行。

一日發

+

年 年

風 山 山 本 本 雨 路選 迷選

(各題十

句

·以

內

各地柳壇(會報 近作柳樽(雪等) 麻 每 號 集 生 路

郎

選

文章(評論研究感想吟行漫文) 社 告

▲投稿其他につき御

料封入の事。 問答はすべて返信

粉

切は事務所宛

店書捌賣

▲締切は厳守された

と封筒に朱記の事 書一川柳雜誌原稿 ▲書體はなるべく楷

▲文章は二十字詰原

春

稿紙使用の事で

▲各地會報は半紙判

原稿紙に清記

0 事

轤

價

mp 容 拾

定 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢 臺箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢 金子

何月號よりと御指 御通知願ひます 便を差立てますが御不在中にでも預ける様に願ひます、 に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金郵實であります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます▲送本封紙 (一年分)には定價の外に手數料十錢を申し受けます ▲川柳雜誌に開する御用件は個人宛にしない U 示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記し 座 七五〇 五 0 一な排込 みに なる ▲御注文には 但集金郵便 0 かい 事

事 發

編輯 務 飨 發行印刷人 麻 阪 市天王 JI 成區玉出本通三丁目三六番地 寺 區上沙町 本通 三丁目三六番地

七

番社

可一丁目五一番語天下茶屋二

都) 三宅 (名古屋)靜觀堂 お、實文館 (函館)石屋(東京)が、東京堂が太巖松堂よっ吉岡書店 ほご玉森堂 伊國屋 ぎん三味堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館)石屋 京 市 洲 田 185 女 市內各書店

社東

載

一報下さいますれば 相談に應じます。 誌 0 廣 告 に就

告廣